嶋守

江見水蔭

千島ケ崎の突端から海上百四十九里、それだけ本州から隔たつて居る處に紅の島はある。周囲八里、四面が屏風を立てたやうな絶壁で、港灣と稱すべき船着場が無く、やうやく珊瑚礁の突き出た間に風波の靜かなる時を見定めて乘入れる仕末。鉞に木自由此上もない島根ではある。

此樣に船舶が碇泊の便を欠いて居る、それ故でも有るまいが、本州からの定期航海は一年に僅か二度切である。それも霧ケ島に來るつひでに、ほんの申譯として立寄るのだ。でも格別これを不便と感ぜぬといふ島人の呑氣さ加減、生存競走の激しい渦巻の外に立つて、桃源の夢の未だ醒めやらぬのが、これで以て能く知る事が出來る。

島人はそれで好いかも知らぬが、斯くも行通が不便であつては、常に社會の進

はんとして、不絕あくせくと心を配つて居る本州の人を連れて來て、此

活させる事に仕やうものなら、唯最う恐入つて、半月經たぬ内に逃出す事であらう。

斯の如き次第であるから、爾は〻此虹の島は、本州の地から見放されて、浮世の人からは見捨てられて、別物に爲れて居る形であるのだ。其樣に不自由なるを知つて居ながら、奴んで何故我は渡航した、高瀬文三郎は何故まア來たのであらうか。

嗚呼、それも其、我も島と同じ運命の下に居る見放され漢で、誰取合ふて呉れる手もない、我も亦能に絶るといふ念もない、孤身獨立の人間である故にだ。綺麗な意味での喰詰め男が、島に唯一人の醫師として招聘せられたのである。

我は曾て地方廳の官吏にも爲つた、銀行の役員にも爲つた、學校の教師にも爲つた、新聞記者、政黨員、或は鑛山の工夫の元締、紡績の女工の監督、某書店の管頭となつて教科書の運動にも豫かり、鐵道會社の發起人の仲間にも入つて請願の奔走も仕て見つ、其他一月二月、或は半歳一年、ちよいと爲つて、ちよいと止めた職業は、數知れずだ。職百番、有らゆる物を嚙つて居る中で、一番不得意なのは醫師であるが、其醫師が又一番年期が積んで居るので。實は實家の親父も醫者で、實家の岳父も醫者であつたので、子供の内からグラム量器を持たされて、それから其頃は未だ存して居た醫科大學の別科生に爲らせられて、でも中[illegible]で退學は仕たが、兎に角に前期後期の醫術開業試驗に及第して、免狀を得られるだけの學問は爲せられたので、厭々ながら兩家の親父の此世に在つた間だけは、眞面目に某醫院の助手は勤めて居た。其後醫師が止めたいばかりに、諸々の職業を仕て見たので、それに悉く失敗して仕きつたので、今又元の醫師に復つて、最も不得意なる我が醫術を、虹の島内に再び施すやうに爲つたのだ。此肝煎は、總ての人が我を見放した中で、此人ばかりは何の見る處があつてか、何處までも世話をして彼下る石川久方先生で、何の時でも失敗すると、忽ち此先生の處へ驅付けて行くので、彼の記者にも教師にも官吏にも役員にも、其他の職を得たのも皆先生の周旋、若しくは紹介を得て、先生の友人の引を以て、それで爲る事が出來たのだ。

が、如何に人を容れる量の廣い先生とは言ひながら、今度こそは最後の口入で、これを又仕損じて再び本州へ歸るやうでは、最う如何しても取合ふては彼下ぬので、我たる者、又何の面目があつて、のこ〳〵と行かれやうぞ、然より大決

心が有つて來たのである。此島で一生を送る爲に、そして埋もれて仕まふ爲に、浮世を全く振捨て思切つて渡つて來たのだ。此上は何んとしても、小感情の上で人と衝突する事無しに、又大感情の以て我を動かす事無しに、極く平和な生活が送りたい送りたい全く送りたい。これより他に希望は無いのである。

島民何千人、有難い事には皆我を信用して與れて、そして尊敬して與れて、醫者樣々々と彼方からも此方からも呼んで與れる。それは病人のある無しに關せず、それ、芋酒が出來た、それ、龜の玉子が湧出つた、信天翁を料理した、鯨の鹽漬の口を明けたなどと、殆ど毎日の樣に歡迎せられる。嗚呼、氣毒千万な、我はそれ程上手ではないのにと初めの內は恐入つて居たが、段々土地に馴れるに隨ふて、人間が頗る單純な性質だけに、病氣までも複雜な難病が少なく、加へて土地が佳のに氣候が惡くないので、難も身躰が健全ゆゑ、小量の藥劑さへ與へれば全治して仕まふといふのが分つて、大いに我は安心した。これといふ風土病[illegible]亦無いにも安心で。鹽里母や苦味丁幾や或は安知歇兒林などが最も多く調合されると言へば、それで大概病症の如何が知れるであらう。

此樣な次第であるから、實に我は此島の醫師としては適當な人物で、此所に唯

一ッの高山は鷲ケ峰、此所に唯一ッの河流は白玉川、此所に唯一ッの神社は本黑明神、此所に唯一ッの醫者としては、我高瀨文三郎が貴ばれて居るに、何んの不思議もないのである。

其代りとして、我は島費の內から支辨せられて居る島の備醫であるだけに、診察料も取れねば、藥禮も亦受ける事が成らぬ。其又代りとしては、家は勿論、食品、衣類、皆島費の內から出して與れるのだ。何一ッ不自由は無い。八丈島、小笠原島、皆此制だと聽いて居る、本州の人に聽かせたら虛言であるといふかも知れぬが、まかし、本統だ。

それで時候は冬暖く、夏涼しと來れば申分無しだが、冬の暖いだけに、夏の暑さは一方ならず、故に裸躰で往來をするのが多いけれど、これも島に唯一人の巡査が、特別を以て違警罪には問はぬとやら。

であるので、家の構造が此暑さを凌ぐ樣に工風されてあつて、棕梠の皮で葺いた屋根は、思切つて大きく、樅子の葉を網代に組んだ軒は思切つて出張つて、檳榔樹の木で建てた樣の下は思切つて高く、家は眞四角で、四方が雨戶で、丸で明放して風を通す樣に造つてある。天井は有つても疊がなく。板の間には蒲

建か、頭産か、少しく上等で、紙位。財袋は有つても、蓆も床の間も戸棚も押入も何もない、物置と臺處とは別に又其四角に建てあつて、軒がこれは違ふのだ。大きな家になれば間毎々々の仕切に障子又は唐紙の立てゝはあるが、これを取去れば例の通りで、家までが裸躰に爲つて仕まふのだ。

扨て何不自由もない、それは我一個に取りて今日の境遇からいふのではあるが、事を欠かぬ其中でも、唯困るのは清水である。これには甚だ欠乏を感じるので、白玉川の邊の者は好けれど、我が住む附近では皆何處でも、これには常に困つて居るのだ。雨垂の水は溜めて洗濯の時に遣ひ、飲料其他には梅の森の中の八千代の井戸まで行かねばならぬ。それは昔八千代といふ女が恐ろしく早天の時、命に掛けて井戸を堀つたといふ口碑があるのだ。女の井戸堀、そればかりではない、手荒い勞力は皆女の手で爲される此島。

此梅の森までは我が住む小渚の村の家からは、十五六町もあるので、其遠い處を米飯釜の老婆は毎日々々汲みに行くので、桶を頭に載せて、平氣で歩く姿、八潮大原の女にも似通ふて、甚だ趣がある。水桶ばかりではない、何んでも彼でも、女等は頭に載せて歩くのである。

我は秋の季に來て、今は春の半期、大分島人に馴染が出來たので、思つたよりは淋しさをおぼえぬ、といふものは、我は頭を下げべき人の前へ出ては、却つて腰が折られずして、眼上の物とあると逆らつて見たい性分なる代りに、目下の者と見れば却つて此方から平等に出て行くのが、これまでの自家の處生法で、それで毎度失敗は仕たのである。教師であつては校長と仲が惡く、却つて生徒とは睦まじく。記者と爲つては社長と物爭ひを仕て、却つて活字方探訪員等と親しみ。鑛山の工夫、紡績の女工、それ等の統御が出來なくつて止めたのではなく、却つて様主等と衝突したといふ譯で、それで以つて今日まで來たのである。

今はこれ大方に眼下の者ばかり、無鳥島の編輯の職はあるけれど、實に一人の衝突者が無い、其處で我は人が威張るのが嫌ひなだけに、我も亦人には威張らず、平等に誰とも突合ふので、今度東京から御座つた醫者樣、誠に好い人だ、優しい人だ、前のが馬鹿に容躰ぶつた、彼と競べると大變な相違と、人氣は扨て妙な處にあるものだ。

我も最早や三十八歳、種々な事を遂つただけに、此島の人々を相手にして、文

際の術を巧みに仕て退ける程の技倆は持て居るので、言はゞ虹の島を手の内に、丸めて、丸藥に爲る位な事は譯はない。

此調子で行くので、殆ど毎日の樣に遊びに出掛け、次ぎから次ぎと遊渡つて行くので、家に歸らぬ事もあるが、さりとて此留守の間に、急病人との迎ひの者も來れば、來る樣な病人があれば迎ひを出さぬ前に、行つて居る先きの家で、それが知れるといふ殆ど島は一家の有樣。これが樂しくなくて如何しやうぞ。」主人既に斯くの如し、儲婆までが見做ふて、二日も三日も家を明けて遊歩く事がある、でも盜人は實に百四十九里以内には居ないので。

或朝二日目で家へ歸つて見ると、例の通り婆樣は居らぬ。米飯は炊かずとも芋を蒸かせばそれで好いが、困つたのは水で、湯茶に第一差支へるので、仕方がなく、水桶を持つて、迎も頭には載せられぬが、如何かして汲んで來やうと、十五六町もある砂道、芋畑の間を通つて、彼の椿の森へと向つた。

醫者の水汲とは茶番にも此趣向は有るまい。これが此島なればこそ出來もすれ、我なればこそ遣りもすれど、他の地に他の人が此通りに仕たならば、可笑なものと獨微笑みながら歩く程に、やうやくにして森の入口に着いた。

紅、白、絞、一重、八重、花は繁れる葉にも劣らぬほど椿の老樹にひしと着いて、小島はこれに集まつては囀る。島が飛ぶ、花が落ちる、あまりにそれが多く入亂れる時は、いづれを島か花かと見分かぬ位だ。けれども、花は引切りなくは落ちずして、島も時には飛ばぬ事がある。極めて靜かに銀まつて居る場合に、其場合に、我は恰好森の入口に着いたので、それと同時に、ぱたり、ぱッたりと、其處此處に花が落ち、島は四方八方に亂れて飛去つたのは、我が足音に驚いたのか、其驚いて飛ぶ島の翼に觸れて花は落ちたのか。

此入口から、殊に繁茂して居る椿の樹の中の細路を辿つて行くと、二十四五歩にして、小廣き平地に出る。其處の眞中に八千代の井戸はあるのだ。

此所では飛ぶ島もなく、落ちる花もない。けれど、我が足音に均しく驚いて此方へ向くは、紅、白、絞、一重、八重、其椿ならぬ島の乙女の大勢、これ皆水汲にと來り集つて居るので、釣瓶は一個、汲手は十四五、順番を作つて次ぎから次ぎと汲むので、其間の待ちくらに、それ〳〵の高話、或は戯れの打合ひ追掛け合ひ、賑々しく騷いで居たのが、我の來るを見ると忽ち、鳴動を鎭めて、そして視線を悉く我に集めた。手に釣瓶を持つて居る女も、頭に水桶を頂いて居

る女も。

此の女達は、日に一度は誰も必らず、八千代の井戸に水汲みにとは來るのである。

されば此所の森の中は、女達の倶樂部ともいふべく、此邊の女の誰一人此所へ來らぬ者はなく、何人も皆水汲みにとは集るので。いろ〳〵樣々の會話はそれからそれと始まるのである。それも時刻に由て、仲間が變り、又話題も替るのだ。朝は殘らず乙女達、晝は大概に女房達、晩は年增から老婆までと、自然に定まつて居て、朝娘晝嚊晩婆との諺もある。何女は嫁に行つたゆゑに最う晝から出掛けるであらう。何女は此頃朝見えぬが、これも嬶でも取つてか、など、水汲の仲間はそれ〳〵に身上を分けて居る。

虹の島と言へば女の美しいのを以て名が有り、美しいのは色の白いのと髮の黑く長いとで噂が高く、其の美しいのが能く立働くを以て世に知られ、其女の立働くのは、虹織の機のわざと此水汲とが重なるものであるので、我も此島へ來てから水桶を頭に載せて歸行く姿は度々見たが、井の源を見るのは今日が初めてゐるのだ。

今は是朝の內、乙女の仲間が集まる時である。均しく此方へ向いた乙女達は、皆々いづれも色の白く、髮の黑く濃く長く艶けく房々として居るのを、束ね切れぬを無理にといふ風情の垂げ結にして、千條、万條、堅に、横に、縞にいろいろ好みはあれど、いづれも虹織の筒袖に細帶を前で結んで、片裾をちよとはしをり、白木綿の腰卷の短かいのが一樣に見えて居る。これが双雛も彼も、頭に頂く月の輪といふ釜敷の如き物と、白地の手拭とを持つて居て、それで双十が八九は草履を穿かず跣足で居る。今此乙女の中には、知己の者も四五人はあるのだけれど、誰が誰やら一寸見分けかねる程に、同じ樣な年頃、同じ樣な扮裝、同じ樣な美しさ。

如何に洒々とした男でも、斯う女が澤山居ては、ちと羞含ましくなるけれど、紡績の女工の取締をして居ただけに、左程顏を赤める事もなく、我はずか〳〵と進んで行つた。

『醫者樣が水汲に御座つたよね』

『おう、醫者樣が、まア水汲に御座つたよね、珍らしい事の』

『これはまア醫者樣が水汲に御座つたよね』

珍らしい事の〳〵と、忽ち森の中は此噂ばかり。

『其醫者樣は珍らしい藥を飲んでね、今日から娘に成つたのだ。仲間に入れて水を汲まして呉れないか。』

と、我は戯れた。乙女達は、どつと笑ふ。中にも一人口を開いて。

『そんな藥があろかい、有ろと仕ても醫者樣が女に成らしッたら、そりや、晩からの仲間に入れるわさよね』

と戯れた。

『酷い事を言ふではないか。そんなに我は年寄でもなし、せめては晝からの仲間とでも言つて呉れゝば好いのに』

『醫者樣よ、そんなに若いのが望みなら、珍らしい藥を敎えて上げやうに』

『醫者に藥を敎える奴もない……だが、又、どんな調合だな』

『敎えるのは、何んの易い事やが、お呑えしッたら、直ぐに遣りなさるかの』

『直ぐ遣つて見るね、朝の仲間に遣入れるなら』

『朝の仲間に入りたいなら、其鼻の下の髯なア』

『ふむ、此髯が』

『それな、綺麗に剃落して仕まいなさろ』

『それは藥を飲む時の邪魔にでもなるといふのでか』

『いゝえな、それがあろから年寄つて見えるわさよね』

『なんだ、馬鹿々々しい、それが藥か、此奴は一杯擔がれたな』

皆々共に打笑ふた中の一人は極めて眞面目に。

『そりや、其通りや、悪い事は言はぬにの、東京とやらでは髯がはやるかも知らぬけれど、此島では好かぬわさよね。それ取つたら本統に美い男や、悪い事は言はぬにの』

『然う如何も髯が許判が悪くつては、仕方がない、剃つて仕まふよ。然うすれば最う一も二もなく、朝の仲間に仕て呉れるだらうね』

『するわさよね、爲るわさよね』

と皆口々に言囃した、中に又一人。

『けれどな、若し髯を落して美い男に成らしッたら、嫁になり手が多くなつて、どしても、こしても、一人ではおくまい、朝の仲間は三日か四日、

いつかしら壺からの仲間に組入れられて仕まいなさろ』

『それ程惚れ手が有るやうなら、いよ〳〵鬚は落すとするが、鬚の有る内は誰も取合ふて呉れぬと見える、あゝ』

と我はわざとらしき歎聲を發しると、皆々又笑ひさゞめき、どれ新しい仲間に水を汲んで進ぜやうと、一人が水桶を運べば、一人が鈎瓶を取る、忽ちにして清水はそれに滿ちた。

『さア醫者樣よ、水は汲めたが、これ、載せては行かれまい、擔ぐとしても其肩では、どしても、こしても、いけなからうに、誰か親切者は居やらぬか、運んで上げたら好からうにの』

と一人が言ふに我は突込んで。

『それ、それ、實は其事だ、誰か然うして呉れないかな、然うするとどんなに喜ぶか知れないぜ。喜ばして見るがいゝ、喜ばし甲斐の爲る男だぜ』

『喜びなされずとも、醫者樣の事だに、其位な事は仕ますわさ。けれども、其處にな、此方からも願みがなァ』

『笑つて居るな、又鬚の事かい』

『それな、本統にそれな、綺麗に剃りなされ。可恐らしふて、何んとなふ側へ寄りにくい』

『あゝ此鬚、何も威嚴を作つておどかしに生して居るのでは無いのさ。我だつて、ちゝむさくッて、剃落したいのは山々だが、仕樣事無しに生して居るので、理髮床は遠くて、下手と來て居るのに、家の剃刀が刃が落けて居ると來て居るので、自分であたると始終疵ばかりとさえて居るといふ仕末だから、それで一層生した方が好いだらうと、我慢して此通に仕て居るのだ。嗚呼、獨身者は悲しいものだ、鬚を剃つたら女房に成り手が多いといふけれど、剃つて呉れ手が無い爲に、我の鬚は生してあるのだ。如何だ。それ程氣に成るのなら水を汲んで持つて來て呉れる親切つひでに、誰か剃つては呉れないかね』

『おう、おう、面白い、それ面白い、行かうか松野、小芳も行きやれ』

『緒絶が行きやれば、妾も行かう。これ、綠も行かぬか、田鶴も行きやらぬか』

『尾花よ、磯菜よ、皆、行かうに』

忽ちにして七八人、興に乘りて行かう〳〵と立騷ぎ、早や月の輪を載せて、我家の水桶手ふて、雖頂かう、彼持たうと、つまらぬ器も名譽の物に爲つて引張合ふ内に、折角の水の二ゆり三ゆり、ゆりこぼれた。

『皆、そんなに、いつまでも遊んで居て好いのかね。家へ歸ると阿られやア仕ないか、水汲が遲くなつて』

『好いから行くのや、心配止めなさろ』

と緒絕といふ女の落樽三個四個水桶の中へ投入れて、こぼれぬ樣に上蓋と爲し、それを早や抱上げて胸の邊まで持つて來たかと思ふ間に、巧みに頭上に載せて歩き出した。其首の振方、腰の据方、見馴れぬ者には可笑く、見馴れた人には面白く、すろり〳〵と行く跡から、松野、小芳、綠、田鶴、尾花、磯菜、さゝめき合ひて從ふた。我又此後に從ふて歸路に就いた。

これまで島に居ても、女の客來はこれが初度で、加之此樣に大勢來たのは先づ無い事で、爲に主人はまご〳〵した。

七人の女は雖も皆跣足、其跣足を手拭で拭いたばかりで、其儘に上へ遠慮無しとは敢くではないか。勿論これは男でも爲る、其譯で、道路は一面に白砂、泥土でないので、これでも濟む。殊に水の貴重なので、洗ふのは勿躰なくもあるし、又草履を穿けばとて砂中に埋れるので、跣足も同然だから、

『醫者樣、さア、何處に剃刀があるのや、妾出してこよ』

と皆ふがあれば、目付出した盥に今汲んで來た水を別けて。

『さア、濕しなさろ』

と出すのもある。誰が主人だか、彼が客だか、分らないので、これが初對面若しくは一二度會つた人達とは、如何しても見えぬので、此無遠慮と此不作法とは、本州人の敢く處ではあるけれど、又此急に馴々しく持つて來る内に、皆ふに皆はれぬ親切があつて、誰も無邪氣なかざりの無い風情は、決して此島以外の娘に見る事が出來は仕なからう。我は實に嬉しくつてならぬ。何んとするぬ爲る通りになつて見やうと、三十八歳の面を子供の樣に突出した。

探出した剃刀を取つて、松野といふのが後へ廻はつた。そして仔細らしく掌で刃を合せて立つて居ると、小芳といふのが鬢を水で濕めして與れる。他は皆取卷いて松野の跗前如何と見詰めて居る。正に是、我は解剖臺上の屍躰も同然だ。

敎師が小刀を取つて立つて居るのを、醫學生が讀んで覗て居るの趣きなきにあらず。嗚呼、險呑な執刀者、此屍躰は生きて居るので、一寸でも仕損じは眞平御免蒙りたいのだ。

『さァ〳〵覺悟を極めなされ、落すぞな、鼻を』

『間違つて鼻を切落しては困るぞ』

『能くしやべりなさる、唇でも切ろか』

『と、と、と、御免だぜ』

『盧言や、何んで切らうに』

『切りかねまいものでも無し、油斷が出來ないから、斷はつておくのだ』

『此上唇を切開いたら、もつと能くしやべつてやろの』

『ひつゝ早や一當、剃掛けて、我には口を開かしめぬ。が、これは又荒い剃り方、ひり〳〵と痛さに堪へかねて、押退け。

『御免だ〳〵竹箆で岩海苔を落すのとは違ふぜ、痛くつて、痛くつて』

と我は涙含んだので、忽ち松野は退けられ、代つて後へ廻はつたのが、助手であつた小芳。

『さァ妾が代つたに、醫者樣よ、安心仕なさろ、痛くても我慢しなさろ』

とこれは又當りも柔かであつたが、如何してか下唇の下を、ちょッぴりと引掛けて切つた。切られた我よりも側の見物が承知せず。

『大事な醫者樣の顏に疵をさせて、何んと仕た事。小芳さんには委して置かれぬわさ』

と又代つたのが尾花、この逆剃りが痛いので、毛穴から血を吐出すと、又代つて田鶴やら、綠やら、つまり七人の手に鼻の下の八字を弄ばれて、其痕の痛さは溜つたものではない。

『最う好い、最うこれで好いから、これからはお前達の仲間だぜ。醫者樣には病氣の時ばかり用のあるものと、平常打遣つて遊びに來ぬなんざァ、いけないよ』

『遊びに來は來ますけれどな、のう、皆さんよ』

と緒絕は言掛けて、友の方をずらりと意味有り氣に見渡した。

『それ、それ、髯を落さしたのは水汲の仲間入りにや』

と尾花は言つた。

『妾達の遊びに來るやうに仕やうと思ふてなら、又最一ッ有る事が有るわさよね』

と磯菜が言ひかけて居る處へ、歸って來た米飯焚き婆、自分の外出は棚に上げて。

『えい、まァ、女郎達が、來たりや、來たりや、まァ和主達は醫者樣を友達の樣に思ひよって、妾が留守に種々と巫山戲よったな。出て行かんか、突と出て歸りやらぬか』

老婆がこれに類した專横、主人を差しのけての小言は珍らしくない事だが、これとても亦惡意ではないので、いつもこれは打遣っておくけれど、今日のみは我これを制して。

『まァ好いよ、そんなに呵りなさんな』

我の此樣に留めるにも關らず、浮足立つたる乙女等は、今までの百千鳥、打つて變つた閑古鳥、淋しく飛んで、それ、眺足の儘、御邪魔樣とも、又來ますとも、何んとも言はずに散つて仕まつた。

我は實に老婆に、見掛けた夢を破られたのだ。何となく口惜しさに。

『折角、新しい友達が出來て、面白く遊んで居たものを、何故退歸したのだなァ』

と詰つて見ると、老婆も之には恐入って。

『何さ、それなら、妾が、又呼んで來ましょ。呵れば逃げるが、招けば來ますわさ。醫者樣は、彼の女郎達が氣に入りやしたかの』

『どれもこれも同じ樣で、皆面白い娘達だね』

『其中で誰が一番氣に入りやしたろか』

『誰と言って、然うさの、我には誰も皆同じに見えるから、それァ言へない』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

七人の娘の月旦、定めかねて我は後を笑ふて仕まったが、老婆は頻りに磯菜の美しく優しいのを說いて止まなかった。

其後娘達は、老婆に呵られたのが可恐かったか、誰一人も來ぬ。我も亦水汲にも行かず、病家歩きも仕なかったので、寂に淋しく感じて居た三日目の夕方。

これから又何處かへ遊びに行かうかと思つて居る處へ。

『婆樣は家にか』

と家の中を覗く樣にして聲を掛けた女がある。見れば彼の破衆である。手には藥壜を持つて居る。

『婆樣は水汲に行つて居るよ、晩方は彼の仲間の世の中だが、何んぞ用でもあるのか』

『いゝえな』

『それでは如何したのだ、お前は藥壜を持つて居るではないか』

『はい、隣の濱右衞門さんとこから頼まれて藥取に來やした』

『藥取になら、我に用があるのではないか』

『でも婆樣が居やすと、恐ろしふてな』

『婆樣が、そんなに可恐いのか、は、はアそれで誰も遊びには來ないのだな』

『遊びに來ないのは、それはかりや御座りませぬ』

『それァ又何故だね、此間も何か一物有るらしい事を言つて居たが』

『有るけれど、こりや言ひませぬ、それよりはな、早く藥を呉れなされ』

『それを言はなければ藥を遣らぬと、當前なら枷に取るのだが、可愛さうだから、それは止めて、どれ、調合して上げやうか』

受付から藥局生まで兼ねたドクトルは、やをら其藥壜を受取つて、五日分、此五日分一時に藥を與へるといふ樣な無造作加減が、此島に此醫者の特色だ。勿論病症も知れて居る、喰過ぎの胃病だから。

我はクラム量器を取つて調合しながら、思出したのは、老婆の言で。此間來た內では此磯菜が第一の美人であるとの事だが、眞か、僞か、と壜を渡す時に、能く見れば、成程美人多き女島の中にも、殊に秀れた艶色、又あるまじくこれ程のを何故此間見出さなんだか、大勢に目移りが仕た所爲かと、我は茫然たりだ。

『さァ藥は出來たが、さァ少し話て行かないか、暮まで制らしてゐいて、それッ切りとはあんまり酷いぜ。婆樣も最う阿らないと言つて居るのに』

『婆樣が本統に呵りなさらぬとなら、それは皆遊びに來ますことは來ますやろが、氣をゆるして打解けては』

『誰も遊ばぬといふ、其譯だな、それを聞かして貰ひたいな、じらすのはお前達のガラに無い事だ』

『言ふたて、無駄や、御免なさろ、又來ますい、そりや藥取に』

『此海女、中々巧い事を言やァがる』

と言ひ樣、逃げんとするを引捕へて、無理に言はせやうと搦へにかゝる、磯菜は笑ひながら首を縮め躰を縮め、逃げんと藥掻く、遣らじと急る、此所へ婦つて來たのが水汲に行つて居た老婆。

『おう、おう、えらい處を見付けたぞな』

と叱れるに、磯菜は顏を眞赤にして。

『それ見なされ』

と可愛い眼で睨んで、脫兎の如く走去つた。老婆は頭から桶を下して、傍側から上りながら。

『如何や、磯菜は美しかろ』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

磯菜美しからぬにあらねど、我は磯菜一人で來るよりも、大勢で遊びに來て與れる方が樂しいのである。我若し磯菜をのみ深く愛せんには、他の、松野も、緒絕も田鶴、尾花、小芳、綠、最う決して來らぬのである、親しく我家に訪れぬのは知れて居る。

我は一人の女を深く愛して、それで幸福を得た結果は今日までの境遇に無いので、我は極端なる婦人排斥論者で、何處までも戀に重きをおくの不可なる首唱者で、女なんて動物は、子供を愛する樣に愛して遣ればそれで好いといふ主義なのだから、それを實行するに最も好き今の身上だ。

我は、それに爲れば、如何に磯菜が美しからうが、優しからうが、それよりも、緒絕、尾花、綠、小芳、松野、田鶴、其他島中の女が遊びに來て與れゝば、それで好いのだ。

女護の島守、其職にいつまでも居て、彼等をして絕えず此處へ遊びに來る樣に爲るには、如何したら好からうか。

我に髯を剃らした如くに我れに今一ッ誓はしめる事があるらしいのは、扨て何か。

これを老婆に訪ねて、初めて、分つた、此島の女は本州から來た人を非常に歡迎すると同時に、其歡迎して此上なき好き人と思込んだる人の、いつしか又島を捨て、本州に歸行くを悲しみ、どの人も、どの人も、なまじゐ優しき情を掛けて、掛放しにして行くならば、追ふて行かれぬ涙の上。後のなげきを見るよりも、初めから契らぬが、好しと、扨こそ誰ら手安くは打解けぬとやら。我を再び本州に歸る者と、島の乙女等は疑ふて居るのか、嗚呼。

鵠守

終

ひうち石

第一回

植木かしは

町へは十里程隔りて與勢村といふあり。戸數百に足らぬ寒村にて、市町村制實施より一山隣の朝香村に合併されたり。國道に接せざれば、此村は此村だけの別天地。高さ五六町もある山々は、目前に立ち。上手四里ばかりの所を流れ來る、勝見川と稱ぶ石川は、恰好の幅になりて、村の東を繞り。曲りたる深淵の所に、其村名を名とせる、怪しげに傾ける橋は架りぬ。一村の菩提所なる隨願寺は、横落山とかいふが半腹に、此村には過きたる屋根を杉森より見せたり。總農夫の、生活の綱なる田地は、東と南に有りて、高橋と、寺と、太十郎の持地の間に、小前ものが一枚二枚と挾まりて廣がり。畠は大概山に仕付られて、斜に見られぬ。生活の度の低くさ、都人士の意想の外なり。純米を吹らるゝは、

一、二、三、三家よりなく。餘は皆雜飯に香物のみ、偶に鯖の目刺、にしん、正月三ヶ日の干鮭が無上の佳肴とは、一日も居られた者にあらねど、住は都、此村の人々他國に出たりとも、必ず歸りて、草鞋を己が住居に脱き、「アヽ、滅に旅行は氣が氣でなくて」と、安堵する人等、を、何が快樂で彼樣所にと、町童までが誹謗言をきゝぬ。

喧かりし蟬の音も無くなりて、秋。木葉は概略落散て、蔦屋は此所彼所に、裸になりて顯はれぬ。繁く茂りたる森も、彼方田が透かし見らるゝ樣になり。一面に刈取られたる田は、早くも來れる雁のあさり所となり。西行が、心なき身にもあはれは知られぬべき景色なれど、農夫は最も繁忙の時、春からの勞力が、實になりし時、刈上げ濟みたる稻の米づくり。家々に物離し臼の音と共に、都びたる聲高く男女共に歌ふ、「うらが殿樣刈上御坐る。一穂に生たか三十三石三斗三升御坐つたの」と節調だみたれど、歌ふ度元氣よく、身體の忙はしきに、若衆の戯言云へば、女共の笑ふも景氣よし。

況て此村には並行者なき第一の富豪者、……小前の者でも其姓を知らぬが者なりて、旦那樣々々で通じて居る高橋の土間は、暦一層に賑はしく、男女十五人ばかり、夜の十時なるに一生懸命なり。此家の作男大助、女三人を相手に手足のやすみなき中に、重調子の口を祇りて、女共を弄ふのか、弄ばるゝのか、言語に斷目なし、

「お常さん。昨晩有つた奇妙不思議の珍話を談らうか」

「何の話。おいひな」

お常がニコリとして、返答せぬを、引取て云ひしは下婢のお金といふ女なり。此村では、縹致好の部類に自分は勿論、人も入れ難くなるべし。尤も、太體は部女の特性なり。

「お前の話だ。打明けても宜のか」と、眞面顏になつて顧れば。形容相應の高笑ひして、

「妾のことッて、お前何をいふ積なの。遠慮する所はないやね」

「白々しくいふの。それ、昨夜のと知て居るぜ」

「なんでも宜からおいひな。聞くから」

何をいふやらと、太助の話りし樣子に、笑ひたい口無理に濟めても抑え切れぬらし。

『云ひ出してから、謝るまいぞ』

『何を謝るものかね』

『屹度謝る』

『謝らん』

『さう強情に出れば云ふぜ』

『くどいやね』

『なら云はう。夜は深々と更渡り草木も眠る丑滿時と、云ふ頃よ、いつも細はせぬが、土間の戸が開て居たから、不思議と思て居ると、誰だか一人、それ、其錢の掛て有る所から』と、頤もて知らせ『こそり〳〵と忍ふ者が有ッたぢやないか……。どうだお金どん胸にギックリだらうアハヽヽ』と、汗拭きながら見れば

『面白い夢ッたね。其樣を聞かうでないか。ノウお竹さん』

『太助どんは、談話が巧いね』

『眞實。盜賊ではなかつたでせう。屹度村の人だッたよ』

『お常さんは魯直だよ、太助さんの云ふ事眞に信けられるものかね。嘘ッ、嘘

『イヤ、嘘でない。誰だらうと見て居ると、お金どんの部屋の方に行くから、ハヽアと合點したれど、餘りの嫉しさに罪とは思たが、密と忍て立聽したら云ふにいはれぬ次第さ。乃公是迄お金どんに、心男が有るとは、知らなかつたが、なか〳〵油斷のならぬものさ。とうだ眞赤になつて居るでないか』と、いへば

『大抵落は其邊と思て居たよ。ねいお竹さんハヽヽ』

『其樣話なら事實かも知れないよ』

『エヽ憎らしい』と脊を打て

『太助どんと、お竹さんと、却て怪しいよ』と笑ながら云へば、太助も、お竹も、お常も、果てはドット高笑ひ、他に混りて、土間に響きぬ

奥には御新造が、主人と談話最中。お着のカスも小前ものヽ晴衣に相當る事は三十五六歳なるべし。

今年は昨年に比へては上作の方と、心の嬉み面に表はれぬ。『皆が何が面白うて笑ふたらう』と土間の方を顧り、莞爾として指先忙がはしげに詰めた煙草吸もせず、下に置て土間に來り。『皆が又談話にばかり心身を入れて、手はお留守で

ないかね』と云はれて呵られるとは思はねど、流石に一言いふものなし。お常が『ハイ』と、返答すれば、御新造は入れぬ。

『お常さんは不要返答したもンだよ』

お金見送ッた目を、尻目にして、クッと睨めば。

『だッて誰も返詞しませんもの』と、小聲にて漸々云を

『だからさ。お前さんがハイといへば、鼓で手り、笑つた樣に思はれるでないかね』

と聲細けれど、力籠めて、鋭く怨まれ。お竹は道理といふ顏色。内氣のお常は、頭を垂れて沈込みぬ。

今日は此丈けと豫定の仕事は終ぬ。夜は更けて、十二時を過ぬらん。女共は勝手に夜食の仕度にや、庖刀の音、茶碗の聲、聞え、若衆は爐邊に圍繞りて、今までの元氣に引換へ、眠氣に欠伸を二ッ三ッ。夜食濟みては、又も俄に騷々しくなりて、各歸りぬ。お常はお金らの手傳して後片付け、挨拶して歸らんとすれば、御新造呼留めて、親仁へとて濁酒を下されたり。

御新造の、いつもお常に目を掛らるゝを、お金何となく羨く、お常が働くほと

小癪に觸るのに、今も濁酒を汲出させられて、不平のたら〳〵

『太助どん。御新造は餘り酷いよ。又さお常に酒呉れるとて妾に出させるもの。温順々々と、可愛がつたッて、なか〳〵氣は綏されないよ。其が證據には去年の夏、それお前も知て居る松助さ。ね。彼程温順と取囃されたに、親仁の百金携て逃亡たぢやないかね』。『でもお常が……』『イヽサお常が然うだと言ふンで無が、其が其と定られぬッて事さ。其に御新造が何かの度毎お常を見習へ々々と被仰るもの、妾はホントに口惜てさ。何だね、孝行だとへ。それは孝行かも知れないが、妾等だッて彼の位な事は爲れば出來るわね、何も賞賛す程でもないい、何に付けても人鑑で羨しいものさ』

と鼻でフンと息して、万丈の氣焔。『ね太助どん』と膝突かれ畳の疲勞に居眠りの太助。仰倒る所を危く支え

『エヽお金どん。吃驚した』

ときヨロ〳〵すれば、お金佛頂顆して

『ホントにお前は坐睡するよ』

第二回

隨眠寺の門前並木に、軒傾きたる、いぶせき獘家あり。支の爲に九太二三本立掛られ。門口に垂れたる菰は何年か葺換せぬ蘆屋根に比べて新しげなり。踏臺の上に泥油といふ石油燭したれば、油煙の類りにゆらり〳〵と立昇るを見ては、此丈けにても家の眞黑に煤けたるを合點せらるべし。耳順近き老夫の圓燈傍に坐膝組み、膝に肱つきて、あらぬ葉を手切に切交ぜたる煙草をつめたる煙管を持ちて音立てゝ吸ひ、夜も更けたるに、人待顏に居るは衣食住に似ず、禰々しげなり。

『今日は餘程仕事が有ると見える。シヤがもう歸りさうなもの』と嚙へ煙管のまゝ自在の鐵瓶下ろして、待てども歸らず「まだか」とポツト煙管投出して、消え掛りたる薪火を火箸もてつゝけば、火花ばら〳〵と散りて燃上りぬ。二三人若者の話して通るに『今終たのだな』と老夫立て勝手に行き、茶碗二ツ持來り、一ツに湯を注て飲み「えい加減に沸いた」と、待つ人と二人して飲む

料なるべし。程もなくお常、草履の音を小く刻みて歸れば

『お常か、大層遲かつた。嘸疲勞たらう。手でも焼るがえい。湯を飲むなら茶碗も此所にある』

『ア、有難う。まだ寒なさらないの。お前さんが退屈だらうとは思ッたが、今日は餘計に有ッたものだから……、其かはり明日は早く皆結了になりませう』

『さうか。今歳は皆が精が出たと見えて、はかが行ッたの、乃公は今日一日何を爲る事もないから。』

と言ひつゝわざ〳〵立て壁に掛け有りし草鞋を持來りて、お常の前に置き『此見や、此草鞋が滿一日の仕事さ。血氣の時は十足は慥に作れたものだが、年老ては叶はぬ、僅か六足が休みなしだわい』

『非常能く出來ましたね。此日短に六足とは容易でないのに、餘程精が出ましたね。我慢に根氣を費ひなさるな』例もながら愛想よき娘の言葉に、親仁ほたほたと喜んで

『うん。其な物でも藁をうんと打て作たから下手相應に惡くはない樣だの』

『悪い段か。上出來でさァね』といふも、水も漏さぬ親娘の中、傍の見る目も羨しい程和らかに温し

『親仁さん。待たれた甲斐に佳物が有るよ。それ』

『なんだ。酒か』

『ア、御新造が又下さつたの』

『やれ〳〵有難い〳〵。御新造さんでも下されんければ、兎ても酒のさの字も云はれぬのに、貰つたから云ふでないが、御新造は誠に親切の方だの』

正直眞法の親仁、徳利を頂戴て有難がれば、お常も心底嬉しく『ホンニ氣の付く御方だね。アレサ其如に香ヲり嗅かずと飲きつしやれ。燗しやうか』

『エ、燗なんぞ爲ずとえいわ』

と茶碗を取れば娘が酌。茶碗とお常を等分に見比べつ、一滴したゝるを指に付けて嘗めたる親仁、幾度か舌鼓の樂は甘露の味や覺ゆらん。

『お常一杯どうだ』『イーエ、妾は宜からお前さん殘さず……』

三杯の酒に上機嫌の親仁、己が娘に戯口いふもをかし。『親仁さん。まだあるよ』

『オヤ剩餘は明日の樂みだわい』と親娘共に寢に就て、居宅に居りし者鼾聲先

つ高し。世の興廢は此處らの里にも有るものにや。此家元來の小前にあらず。二三代前までは此村の中にて隨一の富豪家にて、高橋の上座を占めたもの、が。身上のさがりぶち、誰一人浪費せしとにはあらねど、次第に不如意になりしより、先代も自暴に任せて兎に角奢侈をせしが、今の九郎次の幼少の時迄はまだ二十俵の所得はありぬ。前世の因果と談義付鼻動せど、扨不幸といふもの何所迄も附纏ふものか。今のに子四人ありて、長男が壯健て有たらば四十一歳の男盛り、孫の二人も有べきが、廿五の夭死より引續て殘る子に逝去られ、遂には末娘のお常とのみ味氣なき浮世に殘されたる情なさ、「此娘さへ無いならば乃公も共に死なうもの」と、妻の病死の時つく〳〵と泣明せし九郎次、一年が程は張なげに暮しゝがお常が可愛さ、且は家財蕩盡たれど慣ては餘り苦とも思はず、今では却てお常が孝行に誘ちまはしげなり。

お常親の慈目のみにあらず、性質至極柔順にて万事慎み勝ち、口數もきかず、内氣といふ方かも知れず、男子同樣な鄙女の中には、抜群て女らし。容貌も幕常にて近村での尤物、盆、正月、鎮守祭禮、の外一錢の油たに付られた事なき黒髪もつくねられながら左のみ縮れず、笠一蓋に夏の炎天に照られて田の中に

稼げば色は日にやけたれど、顏重長にして、シカモ此種に有勝なアソトした所少しもなく寧ろ少女らし。年は十九とやら。

人乏しき處とて村内一番との評判每日若衆が寄合ふ家に高し。お金が物嫉するも一ツは叶はぬ戀にあこがるゝ、太助が貧むる反動なるべし。

今日一日に仕事の段落が付くと一年過半は通つめの高樓へお常愉快げに早朝から出行けば、後には九郎次が藥を打つ音高し。

翌日は太助等迄一日の暇許されて極樂遊び、お常につれて九郎次も仕事出さず、まだ取殘されし柿の柔かく赤く熟したるを今日とそは貪婪せめと、所々細もてゝられたる梯子に登りて一ツづゝ取れば、娘は下に之を受取る。

『親仁さん、柿木は裂け易いとやら、アレサ実樣に末は危險やね。其柿一ツ取らでも可でないかね』

危むお常、親仁何となく乘氣になり、ならば鳥の留る所までも進みたく

『氣支せんで宜わい、幼少の時から木登は慣れたものだ』

危いと娘に氣を揉ますも未だ歩まれぬ嬰兒に手に菓子持て玆までお出といふ親心、其裏面には熱き眞情や包含れぬらん。

『ヤ親仁どん。お常さん。柿取だね』

壁掛られて見れば太十郎といふ男なり。お常に氣有り音頭の高調子に己が家の財産を誇りて人を侮り勝の男

『どうだい』

『ハイ好天氣で。マア寄て行かつしやれ』

親仁木より降る間にお常が持ちたる柿を見て

『お常さん』と呼で徵に向けたるお常の顏を……此眼なか〳〵唯ならず。『よく腐れずに居たれ、どれ一ツ下され』と無遠慮に取りて皮も剝かず齒を立てゝ。

親仁衣服の塵をパタ〳〵と拂ひ、手の甲にて鼻汁啜り上げ

『ツイ暇がなくて今日迄取らずに置たが、さして腐敗も爲ませなんだ。マア寄らしやれ』

親仁先に立てば太十郎從ふ。お常裏口より入り、次の間に柿を拾別けぬ、一ツは嫌な人の有ればなるべし。二人は例の圍爐を中に對座し

『お常さ茶出してくれ。柿は幾個有ッた。三十、跡の樣でも取れば有るものだの。好のを二ツ三ツくれ』

お常五個ばかり其傍に轉がしぬ。太十郎核をふきながら『お常さん高慢の收穫は如何程で有ッたね、定めて宜かつたらう。乃公が家のも確に四十俵は有る。其に昨日朝香村の若者の町へ行たに聞けば、なか〳〵價が張て居るげな。マア今年の暮は樂だわい』

此等親娘に自慢の口氣。例のお様と九郎次聞く氣に成らず『ヘイさうか』と冷淡に義理一遍の返答に、少しは勢挫かれ

『此宅でも十俵位は有だらう。乃公が拂ふ時序に貰らつしやれ』

『其程あれば長者様だよ』

ユッと慾いた風、十俵の所得無い事萬々承知の上問ふたのは、正門の敗を掛手から……、暗に己に比較させ様といふ下心、故意とらし。「御大盡様の話には とうで乗られませんのさ」と、お金ならば嫌味で言飛す所なるべけれど、内氣のお常口には出されぬなり。されど胸には障りて早く歸れはえいのにの心で、避け様とするに、呼留られぬ。振り切て知ず顔も成らず、不勝〳〵に『ハイ』も口の中。『來年は乃公が田地も少しはあく筈、親仁さんと相談して作らつしやれ』

『有難が、なんぼ手が無いから』

と親仁の言葉に太十郎が話もポッキと腰折られ、二句を案ずる間にお常が姿は見えず。一は財産で慕はせ、一ッは親切で籠絡しやうといふ淺果敢の考へ。本論に達せぬ内、財産論でいつも失敗。今日も二ッ三ッ愛想話を不興氣に殘して歸りぬ。

『お常來てお茶飲ぬか』

『モウ歸へらしてか、氣障な人ね』

親仁もさすがに快からず

『餘分の金は要らぬ、決して要らぬが、せめて人に蔑まれない丈けの者が欲しい』

『さう。太十郎さんも酉は我家の田を作つたものだとね』

『うん。新田の稼はどうしたのだとお前の聞いた時云つた通り、彼木を堺として南の方はズット我家の所有で、其外天神森、鳥山、彼の山だけても材木が餘程の價値。拂ふた時は無代價同然の安賣と、彼だけは己が親父さんも非常惜まれた。此如事云ふたとて死た子の年、何の益にもならぬ。』

分に安すんずといふでなく、結局は御心善の九郎次、且ツは貧にも慣れては非留も起さぬものゝ、折に觸れては昔日懇しく、死だ子の年といふものゝ此話に て幾分か慰むらん。お常は生れぬ以前の事ながら、親仁よりは却て惜しく、ア ア昔日の十が一有たらと、沈みながら窓より見遣る田面に人一人なし。

第三回

『九郎どん宅にか』

通掛りの一人、足留めて呼ぶは是も水呑百姓

『アイ宅だが誰だい。寄らつしやれ』

『否。今旦那樣に行つたら、御新造がお前に用があるから寄掛けてくれと頼まれた。行て見さつしやれ』

『さうか。娘にか、乃公にか』

『お前だげな』

『乃公にッ』と小頸かたげて『何の用か』

『何の用か乃公にも知んねい』

歩きながら返詞して行過ぎぬ。

『乃公に用とは何だらう。お常お前でないか』

『親父さん。若衆が留守だに、使でも有るのでせう』

『成程、さうか。では行つて來るぜ』

『アヽ』と送て出て『序に今日迄の禮を善く云つて下さいな』

『オット承知だ』尻端折て行くを見送るお常

『なんだか急に年寄られたと』

用といふはお常が推測の通りなり。高橋で今日受取る筈の金貳拾圓、隣村までの使ひ。若者は何處へか遊びに行きたるを呼返して使ふも不便なり、老人の太儀ながら頼むと、御新造の詞の花、同し使賃ならば九郎次に遣ろとは、其實なる御仁心。お常親子の足むけて寐ぬ樣に思ふも道理ぞかし。

隣村から受取た金貳拾圓、紙幣と銅貨とを狀函に納め、川に沿ふて歸る頃は峰の紅葉夕日に照り映えて勝見川の清き水にうつりたる、美しやと俯く頭を起てチラ〳〵と散りつゝ、流れは橋下の深淵に渦卷きて、下手はキラ〳〵と日を浮む

る水の面、映き迄錦を碎くさま得も云はれず、常に目馴れたる所ながら、アー好紅葉と九郎次腰伸ばして打觀め、橋を渡りて中流に來りし時、元來所々朽ち、欄は傾き或は斷えたる事とて。爪先や掛りけん、ハッタと轉びぬ。轉ぶ拍子、咄嗟、手に持ちたる狀函投出せば、板に彈みてポット河中へ水音立てゝ落ちぬ。九郎次『ヤッ、コレハ』と敗亡して我知らず起るともなく起上がれど、あはれ、水底に沈みたる後は澤ひたる紅葉の二ッ三ッ。

九郎次川中をながめたる儘動きもせず、暫くは歎さへ出さず、茫然として見詰るのみ。岸の土の何者に碎かれけん、ころ〳〵と轉がりて落ちたる音に、我にかへりて正躰なき迄泣かなしみ

『ど……どう仕やう。た……た……大變の事したわい。エ、何故轉げたらう、この足が……、轉げたとて放されば落ちぬに、何故放したらう。貳拾圓の大金を川中へ落すとは……放せば落るに……』と四枚五枚殘りたる歯を噛み我と我が手を打ち足は地轉ふんで口惜がり、其でもモシヤ浮はせぬかと、はかなき事も愚に返ッたる心に、又も川の中を見る老の眼よりホロリ〳〵と落る涙、掻拂もせず、見ても〳〵浮ぶ筈なく、知らず顔に流るゝ恐めしの水を見

込みぬ。

とぼ〳〵として九郎次。高橋の土藏の白壁、見るから足進まず、貳拾圓……、貳拾圓の大金川へ落したと、いったら御新造がさぞ……さぞ驚かれやう。エ我ながら夢の樣な、申譯なし。云ひ譯なし。乃公は落した身、叱られても打れても、詮なし。娘ッ、お常に迄憎惡が掛りはせまいか、鎭守樣も助けて下さらぬか、大金を川の中へ……御新造が待て居られやうに……と、我身で我身が怨めしく、門口になれば今更に胸轟き暫しは彳みて涙のみ、どうも這入られぬ、年寄の御苦勞といはれた時、何里でも歩くにはと、力身だてしたに今更……何とか娘と相談して、……意氣地なしと娘にまで愛想つかされぬか、エ、何うしたらよからうと身も世もなく、行處なき心地して寧そ死でのけたき思ひ。

『お常』と呼びながら門こえぬでくれと、願ふ心の切なさ。

『オヤ歸られたの』夕飯の支度にや、襷がけながら出來る顏見るより九郎次、

『お常宥して呉れ』と泣倒れぬ。お常は何とも仔細解らず、氣支はしく『オヤ何うしたの。親仁さん。え、どうしたの』問へども泣くのみ『何うしたの。え、

大變な事ね、大變とはなにさ。親仁さん理由を話して下さいな。え、堪忍して
呉ろつて、一躰どうしたンだらう』と心配けに、且つは恩ぎげに父の顏覗き見、
て問へば『宥してくれ、娘ッ、今日御新造の使で貳拾圓隣村から受取つて歸る
途中、橋の上で……橋の上で……』
又一際の村時雨咽聲に何をいふにや。『お金も何うかしてか。泣かずにさ。落し
でもなされてか』と問へば頷首に『エ、落したね。貳拾圓を？エヽマア大變の
事を……』と親父の肩に掛けたる手も外るゝ斗り、反身て呆れ顏『橋板に躓
て倒れた拍子、飛ばして……飛ばして了ッた』
『マア親仁さん、何うする積り、注意てくだされば好たに、兎に角川へ行て見
やう』と草履穿く間ももどかしく、馳行を『ヤお常さん、大急ぎで何處へ』と
聲掛くるは太十なり。お常耳にも入れず馳抜くれば後戻りして
『エ、何處へ』と強く問はれ
『知りませんよ』とお常にも似ず荒々し
お常橋の左右尋ぬれどなし。九郎次も從ひ來りて川の中熟視れど、既に夕暮の
水暗く、今頃に螢かと怪まる、宵の明星のうつりたるのみ淋しげに見ゆ。

『お前さん。又貳拾圓の金を手から離す樣な……
『だからさ、堪忍してくれ。乃公も何故離したか茫然として解らぬ。是れがな
ければ頓倒ばぬに』と橋板を打て殘念がるにさすがのお常も却て腹立たしく、
今更其樣事して甲斐あるものかと、物も言はず引還すに後から力なげに悄然と
して、襤衣にて涙拭き〳〵來る親仁、弱々しげの有樣にお常今迄怨だが勿躰な
く、いとしや年寄た人、彼樣に申譯なげに妾迄謝て切ながらるゝものを、何故
情なくしたらうと思へば、打、敲、擲たかの樣に思はれて、命に換えて慰さめ
たく
『親仁さん。そんなに泣なくつてもえいわね、餘り心配して病氣になつては詰
らない。貳拾圓が百圓でも二人して稼げば返濟せるから、餘り諄々思はつしや
るな。なんだね妾に心配……心配掛るが濟ないつて』
胸は溺ちて裂ける樣な。自分の塵忽とて現在の娘に迄氣苦勞するとは、親一人、
娘一人の世の中で心の中がどうで有うと思へば堪へず九郎次を抱縋て
『親仁さん。そんな……そんな事』暫くは涙に聲も出ず『合掌だから案じず
ね……、心配しないで下さいな、え、え、親父さん、なんの貳拾圓位……

御新造に詫言も仕難でせう我が謝罪るから後から來る事にして……、オヤモウ通過ぎて仕舞つたよ』まだ睦には暮の早めるをニコリと笑浮べるも慰さめよかしの其心なり、『では妾は行て來るよ、早く歸て下さいな』と行く娘嬢であらうに子なればこそと見送る九郎次、外見には哀はされども心の中には手を合すらん

親父いとほしやの至誠より貳拾圓位稼がば返されんと親仁への甘葉、氣遣めの

みにもあらざれども怨みし反動にや己が慰言に己も慰められ、高橋の土間の入口の戸に手を掛くれば、御新造の笑はるゝ聲聞ゆ。お常ハット身を退り、今更言譯に當惑し、まアどうして詫言しやう、と考へても分別も出ず、慈悲深い御新造、働て返すと云ふたなら許され様と又も戸に近付きしが、さは云へ此迄も仁惠で暮して居る者、稼で返すと云つたら利た風なと却て厭りはせぬか、と深く思へばあらぬ事迄浮び出で、アヽどう仕様とイむとも知らず、グヅラリと戸開くるはお金。サツと魂消る暇にお常は踏躊『お常さんでは此如處に立て居るんだもの』といはれ、先刻からの事見て居られはせなかつたかと胸に波、返辭も速に出ずず

『妾も今迄入らうと思つて』と云ひし時はお金は居ざりき、お常仕方なしにおづ〳〵閾を入る心の中は所謂屠所の羊。御新造目早に見て『親仁の迎にか。まだ歸らぬが、遅付であろ、此方で待て居たがよい』と先越され、ハイとお常だけは云ひし積なり。

國爐に御新造と對坐の辛苦さ。何といはんと胸のみどきつき、如何しても言はれぬに早く〳〵と一方よりは冥鬼が呵責の笞に責立てらるゝ思ひ、密に御新造を見れば用ありてか、何の間にやら居られざりしにホット深く吐息して一度は歸れぬならぬ事、思切て、と決心せしが、又も來らるれば躊躇れて言ひ出されず

『親仁どんはどうしたらう此樣に遲い筈はないが、餘程先方で待たせると見える。好加減に渡せばよいのに、老人の夜遊に暫我過失が有ては成らぬに』と仰有る言葉に、怪我過失とはと、尚更に言出されぬを

『お常どうしたの非常心配げに』と覗かるゝ御新造、結局はこれが緒口とも杖ともなりて

『御……御新造樣』

後はとぎれ〳〵に兎に角、事情を述べて謝りぬ。

第四回

奥に頻に厚き帳簿を調査らるゝ高橋の主人何となく不機嫌相なり。傍に主人を見るともなく見ぬともなく、火鉢の灰掻平しつ或は手を焼りつ、手持無沙汰に居らるゝは御新造なり。主人慌しげに帳簿を閉ち、叱咤して机に片肱凭たせ坐りながらクット膝を廻して御新造に向け其儘暫くは無言なり

『どうして橋の上で倒れたらう』

『どうしてゝすが。矢張老人ですから』

と口籠らる、主人は帳簿を見詰て雙方又默然。音するは沸へ立つ鐵瓶の松風

『お金や、お金、鐵瓶に水加して。……何だねい其坐風は、灰に水滴さぬ様におし』

暫なき御新造の叱言もお金一言も返し得ず、口のみ鑵の如く尖りぬ

太助臺處に煙管の羅宇通しに餘念なき折、お金足踵て小走りに奥より來り、手

招しながら『大變な事が有るよ太助どん。』其餘お金の顏には嬉しさうな色動けり

『大變のことッて何だい』

『御新造が旦那に大叱言頂戴さ』

『なんだ、御新造が旦那に叱られてたと。なんで』

『了解ないの、察で知れさうな者でないか』

『乃公には了解られぬい』

『察がないね、今晩の一件でさ』

『九郎次さんのことか』

『當然さね』

『何が當然か。九郎次さんが金遣したッて、御新造が叱られる理由はないや』

『御新造はお常のとと云へば加擔んだよ、怪らしい。そりや九郎次さんが落したが、御新造も悪やね』

『何故〳〵』

『何故ッてさ、使を爲せたのが御新造だよ。橋の上で轉ぶ樣な、其もえいさ、

轉だからとて大事の金を貳拾圓だよお前、貳拾圓を川中へ投出す樣な老耄親仁に使を爲せるのが惡いやね。其も人手が無いではなし、シカモ今日は皆が遊で居たちやないか、其を酔狂に彼親仁を遣るから如此間違が起つたのだわね、だから旦那がさう仰有も無理はないでないか」

「そりや旦那が腹立ち紛れに云はつしやるのだ、本氣ではあるまいよ」

「何故かい」

「何故の反駁か、お金どんお前も道理に暗いの」

「ハイ、どうで此如暗愚だからね」

「さう慢たつて仕樣かない。だつてさうでないか、九郎次さんが轉だから老耄とか何とか云ふが、我等が行たつて轉ぶ時は轉ぶもんだ。時の災難で仕方がないさ」

「だつてわざ〳〵老人を」

「其は哀憐て遣られたゝらうよ。斯う云つちや何だが九郎次さんは貧乏だし、殊に乃公は休日だと云ふてるから、樂々と遊ばせ樣といふ積りに相違ないて、其も重いものなら仕方がないが金子だから……シテ見れば御新造を惡く言ふのは無理だよ」

「けれど、ね。今年有ッた隣村の芝居御覽な。勘平が惡事すれば殿樣も惡く言はれると二人の嬢な武士が言たちやないかね。其と道理は一つさ、九郎次が惡けりや御新造も惡く言はれるは當然さ。一躰御新造はお常ばかり可愛かッてさ、彼人等の爲にいつも妾が叱言聞くんだよ。今も譯のない事に叱られたよ、口惜てさ。容貌こそ醜いが、仕事は敗を取らない積りだよ」

「それはお前だつて利發だが、お常さんも……」

「岡惚していやに贔屓するよ」

「お前こそ、皆を惡口ちやないか」

「妾のは理だアね」

「乃公のが理だ」

「妾のが」「乃公のが」「エ口惜い、業腹な」と力の限り太助の脊を打て逃る途端、御新造何となく胸もやくやと授れて機嫌惡げに出られ

「お金、何だねい騒々しい」

と叱らるれば、フヲ八當りは御免くださいと辯解ぬ。

貧は憂きもの、いかな英雄も豪傑も是には敵せずして屢涙流すめり。お常親娘も人に侮らるゝ毎に昔時追想す事もあり、不自由の度に金の有りたらばと思はざりしにあらねど、此等は其機其折にて常には親娘の睦さに總ての事打解けて平穏無事にありたりけらし、が、今日始めて貧の憂苦を思ひたり果は俳目といふ事もいで來て、若しや人が疑はせぬか、アヽ今迄の上にどうして調金したものと相談しても別段良方法あるでもなく、遂には何故金を落したらうと九郎次の口癖となり、悔でも詮なし其よりは調金の方法をとお常の言葉に、題始に立返り、水車の同し事のみ繰返し、終には顔を見合はせて吐息となる

『ね、親仁さん。旦那様は働いて納めよと云はれたが二年三年の内には覺束なし。其間人は疑はせまいが、貧……貧乏の悲しさには自分から背後見られて……、イヽ、サ落されたは其は災難、モウ諦らめられたが宜が、諦らめられぬは今の身上、人の思はくが悲しうムんす。イヤ思へば是も案じ過し。旦那様で許されたもの、人が何と言ひませう。妾は御新造さま迄昨日の禮述べて來ませう』と外に出たれど内氣のお常何となく人に見られたくなく、思ひに沈みて來れば九郎次といふ聲聞ゆ、ハット頭を擡ぐに又聞ゆるは貳拾圓

人の家の立聽、さる恐ろしき事するとにはあらねど、氣に掛る人の評判、お常が身體は次第に戸口に寄りぬ

減多に掴む事なき貳拾圓を川へ落したとは此村には珍らしく、誰知らぬ者なし

『アヽ惜い事でないが、貳拾圓をムザと川に置くのは』

『貧にさうたよ。お前游泳が出來るんだもの、取れば宜のに』と笑ひながら云ふは、お金の聲

『云ふ迄もなし、淵でなければ拾ふもの』

『エヽ、圓無しに慾張て居らア』と別の聲

『當然よ、魚に遭る樣な、そんな無慾な人とは違ふはな』

『拾た鯉は盛な離別宴で、龍宮見物に出掛るだらうよ』

『アヽ、乃公は東京見物が仕度なつた』

との高聲に引換へ、今は殆ど外に聞えぬ迄低く

『併しどうして返金すことに話が付たね』

『どうしてだつてさ、外に返す手術があるものかね、少しづゝ稼て償ふのさ』

と是もお勝の聲

『そりや宜い話だ。乃公もさういふ使なら爲度ものだ、川へ落したといつて無利息で一年なりと借れやうもの』

今迄は疑がはれはせぬかと思ひながら、人は左樣にもと安め置きし胸も、事實となりては今更に驚かれ、動悸のみ劇しくなり來て、上氣し、ひゞく耳を満せども後は全く密語となりて切れ〳〵に、正直といふても、橋の上、人の氣は知れぬ、など、開ゆ

日頃から御親切で、殊に妾等の氣質御存知の御新造は疑がはれぬ迄も且那樣始め皆が此通ならむ。どうしても行くは難かしい。さりとて以後行かぬ譯には行かぬに……、御新造樣から落したと聽掛けて覗うか知ら、イヤ〳〵其場を成らぬに……、

見られぬにと人の言はうか、と、うしろめたし、行かうか、行まいか、行かんでは濟まず、行くはいや、左右思案定め兼ねたる折り

『オヤ長坐したと。又叱られるが怖ろしい』

とお金の出て來る樣子に、何處にか匿れたいものと、お常狼狽ゆる間にお金見咎め、『オヤッ』と驚けばお常我知らず駈もどり、是も又村中の評判にならうと、苦に苦を加へ引籠り父と共に泣明しぬ

お常の立腹せしにお金も驚き、暇をかへして怪しく

『昔が居たよ、〳〵』

『エ居たとわい』

『お常がさ』

『宅の前に』

『アヽ、妾が出ると周章て逃て行たよ』

『エ逃て行つた。後暗い所が有るから村中の噂を聞きに行くな』

『マア、ねい』と互に顏見合はせ

『殺如に孝行だと云はれたに、實は恐ろしい者だねい』

第五回

九郎次金を落し、より二日三日は過ぎ五日六日となりぬ。お常等の來らぬに御新造どうしてかより腹立しくもなり、畫忙がはしければ夜にても一度位は來て善さゝうなもの、禮言はれたとて取返の付くにもあらず、我に何の利益なけれ

ど、謝の叶ふたればとて顔向けせぬとは餘な仕打と、其が怨めしい、且那の不機嫌を取直すに何程氣を痛めたか知れぬ、腹立ち紛れとは云へ妾まで叱られて……併し此程の事心屈かぬものでなし、殊に用なくとも隔日には能度來たものの、七日も八日も顔見せぬは解あらむ、咎立は短慮、ア、可憐に、日頃の氣質知りながら怨むとは人の氣は淺間しいものと、思ひし給へどさすがに十日と經ちては疑念も起き、村人の噂よもやと思へど、貧には樸直も至誠も狂ふもの、年日の樣に來たりしものが彼日よりふつゝり打絶えしは深い事情のあること、然れど彼等に限て其樣性惡き所業爲るとも思はれず

「お金。お常は病氣でゝもあるかい」

「何うですね。九郎次さんの義敵く者は致ますが」

お常病氣ならば親仁の知らせに來べき筈

「外へ屋はれて行くのかね」

「聽は存じませぬが宅らしうムいますよ」

「宅なら一度位は來さうなもの」

「ほんとうですよ、御新造さん。妾等も不思議に思て居るんですよ、彼程來たものが。宥恕さぬと仰有たなら尤ですが、御慈けで年限切らずに返す事にして御遣りなすッたのに、妾等にさへ顔見せぬ樣にして居るらしうムいます、だから此頃嫌な評判がありますよ」

是迄ならば其如事で人に嫌疑かけるもので有りませんと、頂上から踏潰された御新造が、僅に

「妾もチラリと聞たがまさか彼等に限つて……」

「ですが御新造さん妙な事があるンですよ」

あたりに憚る聲音に頭のみ差出せば

「何が」とお金の思ふ半分も身を入られぬに、益々話に注意を惹きたく、力と入れて

「ほんとに妙なんですよ。彼の事が有ッた翌日ですよ。妾が外を通ると村中でもウ知て居て、妾に委細話せと云ひますから仕方なしに島渡寄りましてさ、遲くなると思て出ると貴女、戴たちやありませんか、お常さんが立聽して居たんですよ」

「エッ立聽して居たい」

『ハイ』

『立聞なんぞ何で爲たのだらう。お前等何を言てたの』

『なにッて貴女、結局は金窃されて氣毒だッて』

『妙だねい』

『疑がはしいで有りませんか』

『まさかとは思ふけれど』

『村の人もさう言ひますよ』

『一ッ能く聞き質して見やうよ』

『呼で來ませうか』

と忠義顔に立つお金。人を冤罪に落さうの、飽まで離間しやうの、中傷しやうのといふ根強き屈意にもあられぬど、現に角に嫉ましさに、此機に乘じてお當の言を得たい爲なるべし

『えいよ、お金』

『宜うムいますか』

故意呼ばんでも明後日餅搗だから、其時聞かうよ

貧といふ者に我から人に隔を就け、加之立聞をお金に見咎られ、宅に引籠りて門口にも出でず、鬱々と心を痛め、十日ヨリ經る中、考へれば考へるほど彼時行かぬが悔しく、今になつては妙に氣の引けて行かれず、行かねば却て人の疑がはんと身もだへしても術なく、九郎次とてもお常にひかれて困つた事仕て除けしと、泣くのみ

明日は餅搗なりと高橋よりの通知せ、有難いは御新造妾等に御不憫かり遣はず。ふりはへての通知せ、御慈け深やと、親娘此頃になく心嬉しく行悪はれど此頃の詫言せんと決心せり。嗚呼五日ばかり遲かりし

翌日になれば、依然氣の發まぬを我と忍で行けば、心の故か高橋の家十日以前よりは異つた樣にて、集りし村人は朝て、慣で、居られるかの如く、昨夜は悲悲深い方と親仁と喜びし御新造も、面色に怒あるらしく思はれて、例よりは下げるとはなしに、頭さがりぬ

『お當か。久濶だね。後で聞きたい事があるが』

と御新造の詞に詫言どころか、

『ハイ』が精一倍なり

勝手に行けば人々に目を注がれ、自然に頭の垂るゝを、ア、如此に俯向て居ては疑を増すばかり、何が心に辱しい事と揉げんとしてもあがらず

「オヤお常さん。御出なされまし」

とお金に丁寧詞に尻目に見られ、ハットお常の髓は縮みぬ

「久しく見えませんでしたね。風邪でも煩つて」

「イーエ、何やかやつい」ひねりし前垂に半ば面を包みて云へば、「さう」と意味有氣な笑を受けぬ

お常は四面皆上目で睨まるゝ敵の中にお金が一言三言、今日こそは有難く

「お金さん、何か手傳を……」

お金聞えてか聞ぬか、「アゝ忙がしい」と襟ゆすり乍ら手桶提げて外に出るに、お常情なく、入來るお金の袂抑へて

「お金さん。何か……何かさして下さいな」

充分願意を止めて頑む目は既に涙に曇りぬ

「アゝ、仕事が有つたら頑むから休で居て下さい」

表は錦の裏は針。休めといふ言葉は慈けなれど人の働に安閑と居らるべきか、

言はれたる人の恨みなば我の親切にいふたを……。理の了解らぬ人と、文字だけの解釋して云へば、人も頷首なり。人を苦むるには此一手底意地といふ者なるべし、

再びいふ勇氣もなし、お常そつと手持なき手に涙を拭ひぬ。お竹といふ女人に呼ばれて

「お常さん、妾が行て來る間、此大根切て居て下さいな」と切掛けし手を止めて立てば、我知らず「ハイ有難う」と禮いふに、「オヤ直云てさ」とお竹笑ひながら行く

「お常、お常」と御新造の呼び給ふに、返事より先に立ちぬ。餅搗は高橋で十五臼搗かるれば、後は小前者が五軒で二臼ヅゝなり

「お常、今新田の餅が搗終る所、餅米持て來て貰がよい、往では間たい事もあり、行く暇がないかも知れぬ」

貳拾圓の返濟には是迄の上に倹約、今年は餅搗ぬ事と、定めしに料理の元氣よきに、正月の餅迄厭はれぬかと心に慈しく、御新造に問れては貧に負惜するにあらねど、餅は搗れぬと何として言はるべき、返辭する事さへ成らずハラ〳〵

と涙の流るゝを御新造見て

「ほんに變な娘になつたよ」

と常ならば理由を聞かるべきに、あらぬ邪推にツイと立たれぬ。お常是迄の苦辭せねば御腹立ちも道理と、又もや勝手に切殘りの大根とれど、是へば身の不幸のつらく、手には庖丁持てか、持たぬか、

「オヤ、然う、參遊に切られては困るでないかね」

とお金が注意に我に返る拍子、指に庖丁の觸るれば、血は大根に染みたり

「エヽ、此人は無器用だよ。それ大根に血が附が」と情なく奪取られ、ハツト思ふが機となりてか、人目を堪えに堪えし悲歎に、ワツト聲立て我知らず、伏沈みぬ

「どうしたんだらう、此人は」

と怪しむお金に面目なく。我慢にも高樓に居られず、既足のまゝ水屋口より逃歸りぬ

呆氣に取られて見送り居たるお金。太助等も來りて

「お金どん、お常さんは泣たちやないか」

「アヽ、大聲あげて泣て歸つたのさ」

「何うしたのだらう」

「だから妾も理由が解らないよ。大根切りながら指を切たが、疵といふ程でもなしさ」

「又何か爭論たのだらうさ」

「太助どん、ホンニ妾は知らないのだよ」

「子供ではあるまいし、何もせぬに泣くものかな」

「疑い深い人だよ。ようムいます多分御疑ひなさい。皆様に疑がはれ、御新造様にも叱られるには相違ないから、お常さんの宅へ行て理由を聞て來ます」

と出掛けんとするを引留め

「うん明白た。マア其如ことせぬとえいや」

「よくはないやね。疑かはれるは妾ヨだもの」

と問着最中御新造の來られて

「今泣たはお常でないか」

「ハイ御新造さん、妾は知らないのですよ。モウ太助さん始め疑がつて居ます

から、行て理由を聞て參ます」
「ではお常は宅へ歸つたの」
「何もせぬに歸つたのですよ、突然に大泣して」
「アヽ了解た。えいよお金、聞かずとも。妾が聞たい事が有ると云つたから、其で歸つたに違ないよ、して見ると噂の通りだれい」
疑心暗鬼……村夫子居たらば彌子瑕の餘桃と云ふなるべし

第六回

「親仁どん」と座掛けしは、太助なり何日も笑顔で迎ふる九郎次の元氣よき返事なし、されど寢もせず、留守にもあらぬ微は、燈火の壁の龜裂よりもれ、手習紙を皮とせる煤けたる窓のほの明るきに知らる。
「留守かね」と入口の戸を半ば開き、首だけ見はし
「非常寂寞だね」座に九郎次とお常は初めて人の來りしを知り、目と目とを見合はせ。「アヽ」と親娘共に氣のなき返辭を同時に發しぬ。太助上り口に腰掛け

「お常さん。今日、お金奴は何をしたね」
「ヱヽ」と言ひしヨリ答へず、却て自分から
「太助さん」「何だい」と太助の言ふに
「アノ東京へ行かれた時、下婢の給料は幾程の者で有たね」
「其は稼ぎさへすりや隨分金になる所けな」
「時候は隙りはせまいか」
と問ふは親仁。太助怪訝顏して
「お常さん、東京へでも行かうてのか」
「行くと言ふでもないが」と一層鈍りし返答
「此娘が、又妙な事で泣て歸つたてから、後は皆が驚いたでめらうね」
「だからさ。皆が驚いたのは宜が、御新造がいつにない變なこと言はれたから、理由を聞に來たのさ」
「變なことッて、どんな事をか」
今迄の冷淡に引換へ、親娘膝むくれは太助さすがに詞しぶりて
「どんなことッて、その……。御新造が今日お前に聞たい事が有るといはれ

たらう。まゝ前たちが餘り行なかつたから、前々から疑がつて居られたらしい。アヽサ御新造がさ、其も種々理由が有るので、其をお常さんに聞かうと思て居られたのに泣て騎たから、其でフイ、疑惑が固くなつた譯さ。一体、なんで泣て騎たのだね』

『では御新造さんも妾等が悪い事した樣に』

『マア、ね』

マア、ね、の一言に、お常が頑の網は断れたり。よしや村人の疑がへばとて、非難すればとて、親娘が誠實は御新造樣が能く御存じ。いつか人の疑は晴れなんと思ひしも、今となつては、解くに解かれず此村の性惡者となつたる切なさ

『妾は……妾は何う仕やう』と泣倒れ。此胸割て人々に見せたや正直の頭に神宿ると、まツかの嘘、神も、佛も、有るものか、と泣狂ふを、是も同じ思ひの九郎次に、喪處に誘はれてもいつかな寂ず、『親仁さんど……どうして明白を立てます』『宜や、氣を鎮めて呉れ』『イヽサどうして明白を……』『己が……己が立てるから』と布團をかくれば頭より引かぶりて、歔泣の聲聞ゆ

九郎次、是迄の概略を涙ながら語りて、太助どん御新造の疑念が晴れる樣にと

頼めば

『諾ともねお前等の正直は乃公も知つてる。直に御新造に話すから安心さつしやれ。御新造も慢では有るまいが、今の理由知らぬからだらうよ』

『どうか、太助どん生涯の頼だから』と九郎次、太助の縋るを送つて出て。くれ〳〵も頼みぬ

『お常眠てか、太助どんに能く頼だから安心しろ』

と親父の言葉。お常何とて眠らるべき、聞えはしながら、心配、残念、口惜、に胸みちて返辭さへもしえず。御新造樣さへ疑がはれるもの、村人の然言ふは道理。此地には明日よりは居られず、とは言へ立退きなば後指さゝるに違ひない。此村にも居られず、他村へも行かれず、いつそ勝見川へ身を投げて死なうか。死で誠を明さうか。イヤ〳〵死でも人が真實にして呉れまいか知らん。あゝ死なう、死の、死なう。いや、然し妾の死體に親仁さんが取りついて泣て居らるゝのが見えるやうな。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夜は深ぬ。落葉の夜風ザワ〳〵と音す。山にかゝる鋭鎌の如き月に思ふさま頼

見せたる女の、淋しげに笑ひたる艶然として、肌に粟立つべし

九郎次が軒の柱に寄りしが、非山て高橋の前に立止り、家の棟グッと睨みつめ、暫くして泣き出せる女、涙ながらに道を辿りて勝見川の橋にかゝり、水面を覗きて念佛の聲細く（）と幾度か唱へて、やがて身を跳らせ、飛び入らんとす、あはや危き一瞬間、間際とつて、「待つた。待つた」といふは太助が、不幸なる親子の上を氣づかひて寐られざりし夜半に、家の前の人の足音を疑ひて、跟けて來しより如是と見て止めしなりけり。

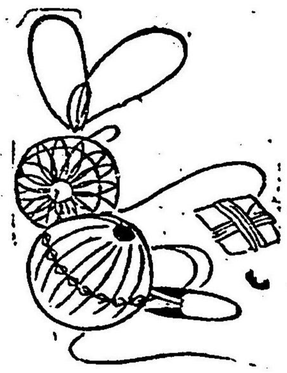
太助の辯解甚だ勤めたりければ、疑念晴れし高橋の御新造、すり寄てお常が手を握り

『お……お常……疑がッたが……疑がつたが悪かッたゆ……るしてくれ』と云ひ玉ひしは其翌る朝の事なりし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

其後太十郎お常の從ふ氣色の見えぬに、御新造の口からならばと媒介口説みし此、所存ありとて躰よく斷はられぬ。是は心得ずと段々聞き糺せば、御新造は何時かよりお常の親になつた心持で振舞ひ玉ふよし。やがては御新造が慈愛に

て、お常が上にめで度事もあるなるべしとの噂高し。



かけ皿日記

上

小杉天外

己が若旦那は、昨夜も外に泊つて未だ歸つてござらぬ無い、火鉢の火は白くなつた、手摺の影は最う障子から外れた、えら退屈な事だ。だけんど、考へて見れば私なんかゞ何も心配ぶつことは無え、村一番の博識でよ、郡會議員でよ、今回の委員でよ……、止めにせう、何處に泊たつて、何時まで歸らないたつて、間違なんか出來すやうな放蕩な若旦那ぢや無いから。

風も凪ぎた、天氣も好い、宿に居て此樣な事を想つてるよりか、見物にでも出掛けた方が可い。折角東京に來ても、此樣なに窓から瓦屋根の續いてゐるのばかり見て居たら、村に歸つてから話することもなるまい。

私此う思つて、鞄から、父樣の書いて呉れた見物案内を出した。そして帶も締

め直した、羽織も着た。何だか氣に懸つてならないものがある。

私は階下に降りて行つた、何ちふ用も無いのだけんど、たゞ降りて行つたのだ。

すると、梯子の傍で髪の毛を奇麗に分けて居る番頭に逢つた、私きまりが悪かつたから、直ぐ便所に入つた。私にしては能く此樣な智慧が出たものだ。

坐敷に戻つて、また羽織の紐を結び直して、それから煙草入も腰に挾して見た、それから帽子を取つて座埃を彈いて見た、幾ら彈いても出るから、何時までも彈いて居た、氣の知れない事だ。

とん、とん、と梯子を登つて來る輕い足音が聞えた。私は帽子を棄てゝ火鉢の傍に坐つて、胸をどき〳〵させて待つて居た、誰も上つて來ない。

「へい、お腕車が參りました。」裏二階で番頭の聲がした。走て見れば、今の足音も裏二階の梯子であつた、何して私の耳に彼樣に違いところのが聞えたらう。

私は羽織を脱いでしまつた、そして火鉢に寄つかゝつて考へ込んだ。其考へ込んだ事は「明日も來てお呉んなされ」。と私が云つたら「まだ參ります。」と云つて呉れた彼のまたちふのは、何時のことだらう、と云ふ事だ。人が聞いたら笑ふたらう。

何處まで考へてあつたらう、私は何時か坐睡をしてしまつた。夢では「其樣な者連れて來やがつて、家になんか置かれ無え、さつさと出て行こ。」つて父樣に叱られた。

何時ばかり睡てあつたか、私は瀬戸物でも碎けたやうな音を聞いて目を覺した。坐敷の中を見廻したが何事も無い、悪筒の茶山花が一つ床の間に落ちてゐる。不思議なことだ、たしか瀬戸物の破れた音のやうであつたが、それでは夢であつたか知れ無え。此う思つて、戸棚から枕を出した。昨夜は、終夜眠なかつたので堪らなく睡い、私は綴くり睡やうとおもつたのだ。

横臥になると、直き枕頭で啜泣く聲がする。頭をもちやげて、耳を澄まして聽いたが、たしかに襖の陰だ、隣の坐敷だ。かちや〳〵と瀬戸物片でも集めるやうな音もする。

私は躍起て縁側へ出た、而して障子が明いてゐるから隣の坐敷を覗いて見た。泣いてゐるのはお仲さんだ。

「お前様、何うしたい。何故泣くだ。」私傍に寄つて云つた。美事な瀬戸鉄片が其邊一面に散らけてある。

お仲さんは顔を擧げたが、私を見たばかりで、何にも云はずに再泣俯した。可哀相でならない。

「お前様、これ打毀して泣くだね、ねお仲さん。」私は「お仲さん」といふ名を今初めて呼んだ、これまで幾度も言はうと思つてあつたけれど、きまりが悪くて遂言はなかつた。

「はあ。」とお仲さん細い聲で漸と云つた。

「此様えな物、購つて貰つて遣つたらはア、あんでも無かんべい。」

「其様な事仰有いますけれど、到底も私には……」とまた泣いた。

「可えちや無えか、私買つて上げるだから。」

「これは貴方、大變お高價いのでございますから。」と云つて、濡れてる可愛い眼で私を見上げて、」南京から渡りましたさうで……、大層お高價い物なんださうで……。」

「可えよ、お泣きなさるなよ。高價えたつて幾らするもんかね、私買つて來て上げるよ。可えから安心して居さつしやい。」此う云つて、私は其皿鉄片の大きいのを拾つて紙に包括んだ。

「御親切は有りがたうございますけれど、貴方に買つて戴きましては、何うも私は……。」

「何故其様えに氣に懸けるだね。可えからよ、私に任せて置つせえ。私何んだ……、お前様の……。」と云つたが、後は口に出ない。とればかり云つてさへ、胸がどき〳〵して堪らないのだもの。

それから、私はお仲さんの止めるのを振りきつて宿を出た。何所へ行つたら此様な物が買へるだらう、私は東京の方角も一向知らないのだ。

下

宿に歸つて來たのは日暮前だ。昼飯も食はなかつたから、お腹がすいてならない。

若旦那は手紙を書いてござつたが、私を見ると急しく御有つた。

「喜作か、遲かつたな、大變待つて居たところだ、疾く飯を食つて支度して呉れ、急に國へ歸つて貰はなけりやならん事が出來たから。」

「國へ歸えるのでがすか、何日かね？。」

「今夜々々。七時の滊車に間に合ふやうにさなけりや可けないのだ。」

「へえ。今夜歸えるのかね。私一人？。」

「然だ。村へ着いたら、直ぐ村長のところへ此を持つて行かなきやならないのだ。可いか、今夜中にだぞ……。」と若旦那は手箱と厚い書類を風呂敷に包みながら、「ま、疾く其飯を食つてさまへ。」と顎で、出てある膳を指圖なされた。

「そして、私また、此方に來るのでがすかね。」

「否、今度は村長が來るのだ。ま、疾く支度しろよ、其樣なにぼんやりして居ちや時間の間に合はんから。」

「支度もさますけんどね、何だかはア、私にはさつぱり譯が解ら無えから。」

私此う云つて、急いで階下に降りて行つた。若旦那は便所にでも行つたのと思つてござつたらう。

旅籠屋の日暮といふものは、まことに忙しいものだ。私は、廊下を駈けて歩く人達に、何樣なに邪魔にされたか知れ無い。

「あのう、ちよつくら待つて呉れさつせえ。」

私の立つてゐる前を、お仲さんが急いで通るから呼び止めた。

「おや、御免遊ばせ。餘り忙がしいものですから、遂失禮をいたしまして。」と私の傍に來て呉れた。髪も顏も一層美く見える。

「彼の皿ね。」

「はあ。」

「私今まで歩いたけんどね、何處でも賣ら無えだよ。それにね、私はあ、急に國へ歸るもんだで、何も困つたね。」

「お歸りなさるのでございますか、お國へ。」

「あー、今夜七時の滊車でね。」

「おや、今夜ですか、まあ。」お仲さんは喫驚して呉れた。

私は、蝦蟇口から五圓札を出して紙に包んで、「僅かだけんどね、お前樣、これで、彼の皿買つて下せえ。」とお伸さんに遣つた。此金は家を出る時お母から貰つた小遣だ。

「いえ、貴方、最う彼品は其樣なに御心配に及びません。」と顏を赧くした。

「其樣えなこと云はねえで、何卒取つて下せえ、私の志でがすから。」と强ゐて渡した。

「此樣なに御心配に與りましては、何うも濟みませんのですけれど……。」とお伸さんの聲は少しふるへた。私は熱く視て居たが、金を持つてゐる手も顫へた。

「まあ可えから、取つて置かつせえ。」お伸さんは手の上に載せて、視詰めてばかりゐるから、私は力を入れて云つた。

「左樣でございますか、それぢや折角のお思召でございますから、頂戴いたすことにさせう。」と云つて、一寸と戴いて、帶の間に挾んで、「本當に今夜お歸りなさるのでございますか。」

「あゝ、本當に歸へりますよ。旦那樣の御用だから仕方が無えだ。」

「お歸國になつたら、今度は何日頃お來京なさるのでございます。」とお伸さんは力無さゝうに云つて呉れた、而して帶の上を撫でた。

「何日ちふことは分らねえが、また近え中に來ますよ。何卒お前樣、達者で居て呉れさつせえ。」まだ云ふことはあるやうだけれど、私の口では云へなかつた。若旦那が呼ぶから、お伸さんに分れて二階に戻つた。

私は飯を食つて、支度をして、大野屋を出た。門口まで見送つて呉れたのは、番頭ばかりであつた。

停車場に着いた。私は待合に腰も掛けないで、人の顏を見て歩き廻つた。明樽子があつたのだけれど、落着いて居られなかつた。

それから、時間が來たから滊車に乘つた。何故だか矢鱈と面白くない。傍に坐つてる婆樣がいろ〳〵と話仕掛けた、私はそれに返答もぶたねえで、窓から顏を出してゐた。荷物運ぶ車が走せて去つた。

「最う出ますから、疾く〳〵。」と彼方此方で驛夫が忙しく叫んだ。

すると、彼方の切符改めるところから、一文字に駈けて來る色の白い女がある。私はそれを見ると、胸がどき〳〵と鳴つた。あぶなく「此所だ。」と叫ぶところであつた。女は隣の室に乘つた。熟く視たが、お伸さんでは無かつた。

私は袂にある瀨戸鋏片を、石に叩きつけて呉れやうかと思つた。滊車が動き始めたから止めた。

かけ皿日記　終

花枕

正岡のぼる

上

神の工が削り成しけん千仞の絶壁、上平らに草生ひ茂りて、三方は奇しき木の林に包まれ、東に向つて開く一方、遙の下に群れたる人家、屈曲したる川の流を見るべし。此處に飛び來れるは、さゝやかに美しき神の子二人、何處よりか探りて來し種々の花を植ゑ試みつゝ、白き羽の一人は黃なる羽の一人に向ひ

「句よ。菫、芋環、櫻草、丁字草、五形、華鬘草の類は皆此方に栽ゑて枕元を飾るべし。

「それとそ善からめ。吾は此方に蒲公英、母子草、金鳳花、金仙花、福壽草などを栽ゑんは色彩如何に。見よ、光よ。色彩善からずや。

「あらまし出來上りぬ。吾は猶五形を殖やすべし、五形の枕は尤も柔軟に願さ

はり著しと君ののたまひしかば。汝も金仙花を減して瀧公英を增しては如何に。

「さても美し。此處は芝の傍にてあるべし。鍬菜、蕺、蓬など少しは著わらん。

「それよ、思ひ出でたり。茅針は肌ざはり悪しとのたまひけるぞ。そこらに一本にてもあらば拔き取れよ。句よ。汝は最早植ゑ終りたるか。

「光よ。これ見ずや、吾谷の底よりやう〳〵に探り出でたる蘭の二本三本、此藤の得ならぬは何處にか植ゑてまし。枕邊少し離れて東風吹き入る丶處ぞ著かるべき。

「それ濟みたらば、山吹を籔の方に栽ゑんと思ふに、汝も手を借せよ、一人の力に及ばねば。

山吹の花一むら植ゑ終りて、二人の神の子は右より見つ左より見つ、自ら喜ところびても見つ、飛び上りて上よりも見つ、手を拍つて喜びぬ。

「句よ。わが君のいでまし處さたなく美しく出來たるよ。これならば、よも五濁の人間界とは見えじ。

「光よ。吾は未だ飽き足らぬ節あり。花の枕、花の褥、花づくしの園のやるりに花の幕無きは口惜しからずや。

「吾も爾か思はぬにはあらねど、何を幕にすべき。

「言はずとも幕になるべきは山藤の花なれど……

「其藤を如何にして吾等の力に移すべきか。

「光よ。吾もさは思へども、思ひ立ちては止まるべくもあらず。吾力のあらん限りを盡すべければ、汝も力を合せよ。

「句よ。汝は膽太き事を思ひ立ちしものよ。されど出來るだけは試みなん。來よ、句よ。

二人は山深く分け入りつ、藤の生ひひろごりたるを求め得て、辛く斧を揮ひつきたる樹の枝より取り放しぬ。森の中を引きずり行かんは枝、荊棘に莖を取らるゝ憂あれば、宙を飛んで提げ行かんと、談を定めけるに、さらばとて二人は斧を携へ虛空に上るに、餘りに重ければ、力盡きて屋森の上に落ちんとす。

「句よ。吾は最早堪へ得じ。藤を放すべきぞ。

「今少しなり。光よ。辛抱せよ。今此處にて森の上に落しなば蔓は再び樹にまつはり花は無慘に散り落つべし。今少しにて園に達すべきに、此處にて挫けなば今迄の苦勞は春の陽炎と消え去らん。

勵みつ勵まされつ、漸くにして絶壁の上に來りぬ。二人は落つるが如く下りし儘、其處に倒れたり。光は頻りに息をはづませて

「句よ。吾手はしびれて、筋の切れたらんが如き心地す。最早吾にはこを植うるべき力無し。汝自ら善きやうにせよ。

句は徐に起き上りて腕を摩り

「實にくたびれけるよ。さはいへ此處迄持ち來りて捨て置くやうやある。汝等れたらば吾一人にても試みるべし。

と言ひつゝ、藤の蔓を取り、少し飛び上りては周圍の樹に开を纏ひつかせ、又下りては又他の蔓を持ち上り、开を隣の樹に纏ひつかせなどす。斯くして仕事半ば成りし時、句は急に悲しき聲を出だして叫びぬ。今迄草に横りて稍まどろみし光は悲しき聲に驚かされて、其方を見れば、句は如何にしけん兩足を藤蔓

に取られて躰は宙にぶら下りし儘、そを抜け出でんと頻りに黄なる羽を揺かしてあせればいよ〳〵蔓は足を締めて、逃れんやうも無きに、哀れに悲しき聲を立てしなる。光はあわてゝ起き上り飛び上り縺れたる蔓を解かんとすれど容易に解けねば、自ら右の手を樹の枝に掛け、左の手を伸ばして、句に之を握れといふ。句は光の手を取りければ、光は、我手を力にして出來るだけ強く足を引き抜けと注意す。句は敢へられたる如く足を引きけるに辛うじて抜けたれば、草に下りて足の痛を手してもみなどす。光は句に代りて藤をあちらこちらの枝に掛け渡し終りて、これも句の側に坐し

「見よ。幕も張り終りぬ。見事〳〵。これだけの遊び處天上にもあるまじ。必ず男君の御意にこそ叶ふべけれ。

と言へば句も四方を見まわして覺えず微笑みながら

「いざ歸りて君に事の由を申すべし。光よ。行かずや。

「句よ。吾に猶心殘りあり。あらゆる花は皆此處に集まりながら薊の鋏けたるぞ飽かぬ心地する。赤き海赤き紫なる海紫なる、薊程美しき花は無きに。

「止めよ〳〵。如何に美しとも薊の刺の君が御躰にも障りなば如何で怒り給はざらん。況して开を移さんこと迚も出來べきにあらじ。

「さな言ひそ。御躰に障らぬ處に植え置かんに其等の心配は無用なり。掘り來らんは困難ならぬにはあらねど、出來ぬ事やある。暫く待ちね。吾試るべし。

光は森の奥に入りぬ。匂は猶痛む足をさま〳〵にいたはりて光の歸るを待つ程に

「匂よ〳〵。早く來よ。

といそがしく呼ぶは光の聲なり。其聲をたるべに尋ぬれば、薊おびたゝしく林の如く生ひたる中に光を見つけたり。匂來ると見て光は薊の中より

「匂よ。吾を救へ。吾は此薊の林にくゝり込みて最もうつくしき一株を得んとするに、手を動かせば刺に刺され、足を動かせば刺に刺され、少しも仕事出來ず。已むなく思ひ絶えて出でんとするに、出口を失ひ、何處へ行くも刺滿ち〳〵て出づるによすがなし。

と悲しく言ふ。匂は眉を顰め首を傾け

「如何にせば救ひ出だすべき。まゝよ、吾もくゝり入りて先づ刺を推しのけ道を開くべし。汝は其時吾に從ひ出で來れ。

と入らんとすれば、光は

「待てよ〳〵。匂よ。二人道入りて二人ともに出られずば何とせん。吾に手だてあり。汝は吾がために釣鐘形の花の大なるを一つ小なるを二つ取り來れ。

と乞ふ。匂は心得ねど教へられし花を摘み來りて薊の中に突き入るれば光は开を引き入れて、大なる花をおのが頭に冠り、小なる花二つは其中に各〻の手を入れて手袋の如くし、頭と手二つとにて刺を押し開きつゝ、やつと薊の外に出で來りぬ。光は手を入れたる花を振り落し、聲高く笑ひながら匂を見て

「さておどけたる狂言なりしよ。紀念として吾は永久此花の冠を脱がざるべし。

と言へば匂も笑ひて

「吾も足を痛めたる紀念を殘すべし。

と共に芝生の處に歸りて、匂は藤の一房を頭に卷きつけぬ。二人は笑壺に入りて、光は

花の冠、　とこしへに
吾があやまちの　紀念なり。
色濃き藤の　花輪世に
いさをを殘す　汝一人。

と歌へば句も
賢しき心、　清き形、
星と輝く　汝が光。
日の影透かぬ　森の間、
花萎み行く　吾が匂。

と和す。二人聲を揃へて
神こそ待たせ　たまふらめ
吾怪我せしと　知らでゆめ。
今日の手柄を　ほめられて、
共に甘露に　醉はんさて。

と歌ふ聲かすかに、霞に紛れて飛び去りぬ。

中

襤褸の着物いたく變れたれどもつぎ〳〵の色紙なか〳〵に畫師に畫かるべき打扮に、半ば落葉を盈たしたる籠を負ひ、熊手を持ちて、森の中を歩み行く十四五の少女、垢つきよごれたれど何となく氣高く、一人この人氣絶えたる木立をさまよひて路を失ひながら泣きもせずいらちもせず淋しとも思はれば恐しとも思はず、恰も森を住所とする者の如く穏なる面持は住むべき世も持たず歸るべき家も持たぬ、世の外の神にやあらん。少女は當も無く下草踏み分けて行く中に、ふと立ち止り、少し躰を傾けて、木の間を透し見たり。何物をか見つけたらん樣なり。抜足して横へ外れ行くこと五六歩、大木の陰に身を隠して覗き見る時、山鳥一羽葎を飛び出でぬ。近けば飛ぶ山鳥を追ひ廻して彼方此方へと走る程に森の奥に稍明るき光を見て、鳥追ふことも忘れ、光を慕ひ行きぬ。

偖に十歩に餘る程の平地、木も無く雜草も無く美しき草夥しく生ひ出でゝ色々

の花を著けたるに、まばし見とれたる少女は籠を卸し熊手を捨て終に花の上に坐りぬ。

「斯る面白き處ありと知らば妹をも伴ひ來べかりしに惜しき事してけり。妹は今頃折樅せられ居るやも知れず。吾も歸らば折樅を受くべきに定まれり。吾が折樅せらるゝは堪へ得べきも、妹の折樅せらるゝを見るつらさは如何にしても得忍えじ。今の母樣憎しとは思はれど。先の母樣あらばさぞ嬉しかるべき。何時もより吾の歸る時刻遲るゝ時は門の外に立つて吾を待ちたまはりし母樣、妹は其母樣の事知らねば、たゞ母樣は恐しき者とのみ覺えたる哀れさよ。それを思へば何時迄も家に歸りたからず。乞食して軒の下に寐るとも折樅せられて庭の隅に夜る明したるを思へば物の數ならず。若し斯る花の枕、花の籠に手足伸ばして一夜の樂しき夢を結びなば、明日は森の中に飢え死すともなか〳〵に本望なるべし。されど出づるに惜からぬ家を出でず捨つるに惜からぬ命を捨てぬは妹あるがためなり、吾家に在らずば吾も折樅せられず折樅せらるゝ妹をも見ずに濟めども、さりとて如何ばなり姉を失ひし妹の戀

ひべき。

少女はつと立ちて崖端危き處迄進み、下を見下しぬ。夕桑は東の空に殘りて、山々緊に暮れんとする時、鴉一むれ二むれ野を横ぎりて歸れば、川上僅かに光りたる水も霞みて見えず。きら〳〵と夕日受けたる屋根も森も一つに黑うなりて、大道一筋白う暮れ殘りたるに、蟻の這ふが如く見ゆるは小荷駄の一列にやあらん。

「あの中に父樣や居たまふらん。

と耳を向けて聞くに、鈴の音かすかに鳴りて、風の吹くたびに父の歌うたふ聲さへ聞ゆるかと覺ゆ。

「父樣はたしかに歸りたまへり。父樣居給はゞ折樅も强からじ。吾は暫く此處に寐て行かんか。

全く暮れはてゝ見る物も無きまゝ、もとの處に歸りて五形の上に身を横へぬれば山吹の花は足を掩ひ腹の上迄垂れかゝりたり。眠らんとするにゆかしき香氣紛々と鼻を撲ちて、我ながら夢とも幻とも分かず。

下

黄金の高殿、水晶の門、珊瑚の枝に玉を貫きたる雲の上の榮華は人間の理想にのみ畫かれて夢に見てさへ珍しきを、千代も八千代も變ることなく此處に住みてはそれにも興盡きて、たまさかに人間界に下りて遊び戯るゝも榮燿過ぎての物ずきなるべし。男神は崩黄の羅を著流して手に短き杖を持ちながら透明なる卓にもたれ

「光は居ずや。匂は如何にせし。

と呼び給へば、二人は紅の帷を掲げて入り來りぬ。

「時こそ善けれ、出で行くべし。光は笙をや用意したる。匂は琴を携へたるか

二人は用意とゝのひたる旨を答へ、さらばとて男神立ち上らんとし給ふ時、白銀の扉風に吹かるゝ如く開きて、やがて女神は身を現し給ひぬ。やゝえばし横

于見給ひし後歩み寄りて男神に向ひ

「何處にか行き給ふ、二人を伴れて。

と玉の如き聲に少し角立てゝのたまへば、男神も稍ためらひつゝ

「今しも人間界に遊ばんと思ひて出で行くなり。御身が靜なる呼吸十ばかりの間に歸り來べきに暫し待ち給へ。

女神は眉を顰め胸を兩手にて抑へながら

「汚れたる振舞なしたまひそ。下界には惡魔も多からんに心を用ゐ給へ。あまつさへ人間にも美女ありと聞くに、妾が胸に火の燃ゆること多かり。今宵も恐らくは人間の美女をや伴ひ給はん。そを思へば胸の火は妾を焼き盡し此高殿をさへ灰になさまほし。あな苦し。光よ。匂よ。汝も善き程に遊べ。足の裏に汚るゝ遊びはせぬ者ぞと誡め給けるに下界の土を踏みたがることよ。匂よ。汝が足に血のにじみたるは何故ぞ。疾く語らずや。

と急きたまへば、匂は畏みて藤蔓に足をからまれたる由語りたり。

「それ見よ。惡戯すれば善きことはあらじ。光の羽の痛く破れたるも要こそあらめ。何したるぞ。

と問はれて薊の中をくゝり出んとて斯く羽を傷ひたる旨言ひ出でぬ。男神は女

神をなだめて

「さな怒りなせそ。實は今宵吾一人の少女を艱苦の中より救はんとするなり。

さはれ汝は吾が仇なる心にあらず。心正しき少女の人間の苦を受くるを見るに忍びず、此處に遮れ來りて御身の腰元と爲さんと思ふに御身も心よく受け引き給はずや。

とのたまへば女神幾にうなづきたまひけるに

「さらば直に歸り來んに其處にて待ちたまへ。

と言ひ殘して男神は二人の神の子を從へ立ち出て給ひぬ。門を出でゝ見まはしつゝ男神

「人間界は暗し。路を誤らずや。

と問ひ給へば光

「よく〳〵究め慣きたる路なれば誤るべくもあらず。今目の下に見ゆる闇の中にも殊に黑きは森なり。あの森の續きにこそいでましし處はあなれ。

とて急ぎ下り行きぬ。男神は光と匂に導かれて闇の中を下り給ふ程に森近くな

れば、先に行きし光は少し引き返して

「はや到り着きぬ。如何すべき。

と言ふ。男神

「少女は來てありや、潛に下りて見よ。

とのたまへば匂は下り立ちしが直に飛び戻り

「花を枕に眠らんとするけはひなり。

と言ふ。

「好し。さらば汝等は此棺に在りて樂器を奏でつゝ『眠れ』の曲を歌へよ。吾は下りて彼の穢を洗ふべし。

とて男神は花の上に下り少女を窺ひ給ひぬ。樂は始まりたり。

寐よ、寐よ、寐よや。
寐るべき時は　來りたり。
人より天に　近き森、
一夜を眠れ　花ざかり。

ねむ、ねむ、ねむれ。
枕を花に　眠る、誰。
ねむ、ねむ、ねむれ。
浮世に一人　清き汝。
神は三たび少女を廻りぬ。又樂の音
寐よ、寐よ、寐よや。
褥を草に　代へて寐よ。
捨つべき浮世　汝が浮世、
濁らぬ夢を　結べやよ。
ねむ、ねむ、ねむれ。
眠らば神に　ならん、汝。
ねむ、ねむ、ねむれ。
眠れと汝を　さそふ、吾。
神はやがて山吹の一枝を折りて振りかざしたまへば、露は水銀の如く凝りて、

少女の顔とも言はず躰とも言はず玉を轉かしぬ。少女は笑ひかゝりし顔に眠を濕へて面白き夢見るが如く起きんともせず。「洗へ」の曲は始まりぬ。

洗へよ、洗へ。
汚れを洗へ　花の露、
露ふりそゝぐ　額眉。
洗へよ、洗へ。
洗はゝ花の　露栗、
栗に冷やせ　腕の撓。
洗へよ、洗へ。
洗へば凝りて　露も霜、
霜置きまどふ　足も手も。
洗へよ、洗へ。
洗ひあげたる　汝が躰、
白玉椿　白き肌。

神は少女を洗ひ終りて少女の額に吻を當てぬ。光も匂も共に下り來れば神は少女をよそはへと命じぬ。二人は山吹、藤を取りて少女の髮に挿し、種々の花飾りを編みて首に掛け腕に掛け胴を卷きなどす。裝ひ終るを待ち『覺めよ』の曲をうらべよと再び命ぜられて、二人は少女の枕元に坐し笙を吹き琴を彈き出でたり。

覺めよ、覺めよ。
眠るは何處の　賤の者、
覺めなば神の　天少女。
夢の世ながら　人間の
夢より出なば　神の夢。
覺めよ、覺めよ。
蕚、五形の　花衣、
藤、山吹の　花かつら。
とゝろみに乘れ　天つ雲、

人を離れて　高き空。

少女は靜かに身を起していぶかしげに四方を見れども何物も見えず。只妙なる音樂の響に感歎の耳を澄ましぬ。斯くと見て男神森の梢に上り給へば、光も匂も樂を奏しながら男神につきて上りぬ。少女は樂の音甚はしく、遠くなるまゝに足を欲つれば、足は自然に地を離れて、飛ぶが如くに森に上りぬ。神と神の子は少女を誘ひつゝ樂を鳴らして次第に高く上れば少女も次第に高く上り來る。少女は不圖我身を見るに種々の花身に纏ひて、闇にも我から光を放つに自ら驚き、上の方を仰ぎ見れば玉の蚤など奮に見るやうに光りて遙に浮びたり。下を見れば烏羽玉の闇、何處迄も黑き中に赤き圓き珠の如き者轉び出でたり。

「こは何としたるぞ。

と怪みつぶやきて立ちとまれば、匂はそと少女の耳に口を寄せ

「上に見ゆるは天上界、下に見ゆるは月球なり。我男神は御身を人間の苦より救ひ出だして天人には爲し給ひたるぞ。

とさゝやきぬ。少女覺えず笑みて

「そは嬉しさの限りなり。されど吾一度人間に歸りて妹をも倶して再び上り行かんは如何に。

とや、氣遣はしげに言ふを打ち消し、光は

「御身一たび人間に下れば再び上るに路なかるべし。はや〳〵上り給へ、君の待たせ給ふに。

と耳にさゝやけども、少女は聽かず。

「えばしが程なり、願はくは待たせ給へ。妹を伴れて直に歸り來んに何の間も入るべき。

とて光匂の止むる袂を振り切つて投ぐるが如く身を落せば、忽ち本の花の上に落ちながら總身泥の如く少しも動き得ず。やう〳〵に正氣づきて身を起し眼を、こすれば、躰は花の露に濡りて香は闇の空に廣がり、始めて夢見たる心地に惘然と行む足下、今しも地を離れたる酢りの赤き丸き月一つ。

花枕　終

「そは嬉しさの限りなり。されど吾一度人間に歸りて妹をも倶して再び上り行かんは如何に。

とや、氣遣はしげに言ふを打ち消し、光は

「御身一たび人間に下れば再び上るに路なかるべし。はや〳〵上り給へ、君の待たせ給ふに。

と耳にさゝやげども、少女は聽かず。

「さばしが程なり、願はくは待たせ給へ。妹を伴れて直に歸り來んに何の間も入るべき。

とて光匂の止むる袂を振り切つて投ぐるが如く身を落せば、忽ち本の花の上に落ちながら總身泥の如く少しも動き得ず。やう〳〵に正氣づきて身を起し眼をこすれば、躰は花の露に濡りて香は闇の空に廣がり、始めて夢見たる心地に惘然と行む足下、今しも地を離れたる許りの赤き丸き月一つ。

花枕　終

春陽堂發兌

春のやとゝ人著
渡邊省亭畫
實價金四拾錢
郵稅金八錢

牧之方

饗庭篁邨作　富岡永洗畫

笠之露

實價三拾錢　郵稅六錢

軍醫總監石黒忠悳先生序
醫學士谷口神太郎君著

本書は醫學士谷口神太郎氏が高尚なる醫學上の識見を以て尤も**通俗平易**に記述したるものなり**外科編内科編**共に素人**療治**にて即治し得る樣編述したればこれを一讀**會得**するあらば**人生**を養ふの功少々にあらず

通俗**病理問答**
第一編　内科之部
第二編　外科之部
實價一冊十八錢　郵税各四錢

醉露仙史著
普頒提摺
花柳於多福

目次
明治雜俎、ゝ坐付。都々逸。新端唄。無類の歌。滑稽名問答、安保多樂經、(定價四十錢)

新作づくし

袖珍半紙摺美本。口畫鈴木華邨子畫

本書は表題の通り花柳に春、情凝りて。香の散る端うた糸の道。皆新調にして。得も云はれぬ味ある文句なれば。佳人才子の虎の卷と謂つべし。殊に充分の禪味を含み。文詞も卑しからねば。大僧正大博士。貴顯紳士も。讀みたまへ。粹に亙り心地よく。醉はず醒めず長壽を。保つ藥は此袖珍に。澤山御坐候

出雲阿國

櫻痴居士

第一　遺恨

男は人に知らせじと、狹き住居の一間なる、襖の唐紙を引立て、靜に座を組み、雙肌寛ろげ、雪の如き膚を顯し、嗜の短刀脫放ち、鼻紙にてキリキリと卷き、逆手に持て、既に腹に突立んとする所に。女は唐紙押拔き、此躰を見るよりも、足もしどろに倒るゝ樣に男の側に走り寄り、短刀もちたる手に縋りて『氣ばし狂ふてか、何で自害せうと成されます、御身樣の御病氣の介抱が屆かいで、此國にお恨でもあつての事で御座りまするか、サア切腹とまで思ひ詰めなされました其譯聞う、生て居られぬ仔細があるなら、國も原は大小差た武士の娘じや、未練に止も泣も致しますまい、立派

軍醫總監石黑忠悳先生序
醫學士谷口神太郎君著

本書は醫學士谷口神太郎氏が高尚なる醫學上の識見を以て尤も通俗平易に記述したるものなり外科編内科編共に素人療治にて用治し得る樣編述したれはこれを一讀會得するあらは人生之事この功少からず

通俗病理問答
第一編内科之部
第二編外科之部
實價一冊十八錢郵稅各四錢

出雲阿國

櫻癡居士

第一　遺恨

男は人に知らせじと、狹き住居の一間なる、襖の唐紙を引立て、靜に座を組み、雙肌寬ろげ、雪の如き膚を顯し、嗜の短刀脫放ち、鼻紙にてキリキりと卷き、逆手に持て、既に腹に突立んとする所に。女は唐紙押披き、此躰を見るよりも、足もまどろに倒るゝ樣に男の側に走り寄り、短刀もちたる手に縋りて『氣ばし狂ふてか、何で自害せうと成されます、御身樣の御病氣の介抱が屆かいで、此國にお恨でもあつての事で御座りまするか、サア切腹とまで思ひ詰めなされましたる其譯聞う、生て居られぬ仔細があるなら、國も原は大小差た武士の娘じや、未練に止も泣も致しますまい、立派

に切腹をおさせ申ませう、又一所に死んで、夫婦が未來で添も仕ませう、其譯聞かねば此手は放さぬ、死なす事は成ませぬ」と女の念力一生懸命、餘りの不意に涙も出す、男の顏を見詰たるまゝ、胸の動氣の高まりて、呼吸促迫く述たりければ。男は女の顏をヅと打守り、雙の眼に涙を浮め、暫く詞も無かりしが、稍々あつて大息を吐きて『お國、許して玉や、我等二人が枠築殿の御勘當蒙つて、出雲を出てから丁度五年、この伴次郎が三年越の長病ひ、御身が信切な介抱は、口でこそ改めて禮は言はねど、蔭では此通り兩手を合せて拜んで居るぞよ、勿躰ない何で御身に不足があらう、其に今余が、自殺し樣と決心したは切ない仔細あつての事、こりやお國、その概畧を聽てたべ。お身も知て居やる如く、余が長の眼病、漸々と痊り掛り、物の間色も見ゆる樣に成たのは、お身が信を凝した立願のお蔭、その お禮を申さうとて、此程から一七日の清水詣、今日も例の通り午過て家を出で、杖を賴に參詣しての下向道、群集に押されて足よろめき、突當つた

は一個の武士、突たる杖で思はぬ粉當、無禮咎の謝罪なせど、聞入もなき無躰の難題、編笠取て雙方が互に顏を合すれば、相手は正しく浦生の浪人、名古屋山三郎と云へる若もの、彼奴め氏鄕殿繁昌の刻には、其寵愛に誇れる餘り、諸人へ對して無禮の擧動、既に先年聚樂の御所にて、余が弟不破伴作が、關白殿下秀次公其頃いまだ大納言家でおはせしに、其御供にて在りけるを、口論の上にて打擲なしたり、其節余が兄不破伴左衞門どの、遊侍の當番して居たりしゆゑ、是を制して鎭むれども、山三郎は聞入ずして言募り、果は伴左衞門殿に向つて相手呼はり、伴左衞門殿は止を得ずして彼を戒め、氏鄕殿へ其由を訴へたれば、山三郎は諸人の中にて恥辱を受け、我等兄弟に對しては、其より深く遺恨を含む。然るに其後關白殿高野に於て御生害の御時、弟伴作は御供に立ち、また兄の伴左衞門殿は聚樂にて追腹切られ、余は關白殿の御恩を受けず、北政所の御廣敷に侍ひしを以て、一命を召さるゝに及ばず、改易の身と成つて、諸方を流浪したると御身も知

れるが如くなり、斯る意趣の有るものから彼名古屋山三郎、余を見知り、志かも余が腰に大小をも挿まで、最も窶々しき躰にてありしを見て、兄に受たる先年の恨を霽さん所存なるか、余を捕へて悪口雑言、剰さへ諸人の前にて、己が履たる草履を以て、我が面躰を打擲なしたる無禮法外、あの山三郎、憎くしとは思ひしが、身に寸鐵をも帶びず、病上りの悲しさは、敵對ことも叶はねば、腑甲斐なくも傍の人の慰めし儘、その場をすど〳〵立退て、歸宅なしたる余が腕の中、無念の程を推してたべ、是と云ふも畢竟は、大社の杵築殿、聊の由縁を以て我をかばひ、合力せられし篤き恩義、それを無にして御身と契り、縁を結んだ余が不所存、父母の罰、杵築殿の罰、的面この身に報ひ來て、斯る耻辱を受たるか、さるに由て余いま此所にて切腹なして相果なば、御身とても杵築殿の御勘當も自から宥て、歸參も叶ふ便ぞあらん、仔細は斯の通りゆゑ、深く此伴次郎、腹かき切て果る覺悟、ゆるしてくれよ、これお國……」と事の次第を語りけり。

男の語るを聽くにつけ、女は且は怒り且は嘆ち、堰來る涙を押拭ひて「ム、扨はあの名古屋山三郎が御身樣の病氣を附込み、嫉くも不法の擧動いたせしよな、其條ならば猶以て御身樣に切腹させては、此國の申譯が立ませぬ、成ほど今のお物語を聞く時は、彼山三郎め、死去玉ひし御兄に深き遺恨のありしゆゑ、御身樣を窘めて、怨を霽せし狼藉と、一途に思召れませうが、否々其にはまだ〳〵別に仔細のある事、彼山三郎、おのれが美男に己が惚れて、主ある女も高貴の方も、懸の棧橋渡り合ひ、道ならぬ不義の數々、女たらしと浮名たつ、世の人口を耻とも思はず、猶更寡る山三が噂、高い聲では言はれぬが、大坂の淀殿松の丸殿、いづれも名をば立たまひしは、御身樣も御存知ならん、左ばかりの浮氣沙汰に飽足いでか、此程から四條の芝居に日ごと來て、此身に送りし數通の玉章、封をも切らで返した に、三日ほど前のこと、祇園林の長が許より使もて、今夜は東國方のお大名、客人の御越にて、是非に舞の手一指所望とあれば、枉ても來らせ玉へよと

達ての招き、心に染ぬ事なれど、營業の詮なさに、狂言果て、鼓打一人召連て赴き見たれば、其客人は山三郎、おのれ妾を欺つて招き寄たるよなと、心に其とは覺たれど、さあらぬ躰して一指奏で、頓て暇を賜はらんと立掛つたれば、暫し待よと山三が引留め、舌たるき戀詞、あまりに腹の立たまま、許して下され名古屋殿、出雲生の佐渡島國は、歌舞伎は仕ても遊女はせぬ、殊には歴輝とした主ある女、御身樣の男振の優姿、世間の女は靡くか知らぬが、此國は歌舞伎もの見る樣な、色白男に惚はせぬぞや、仇いやらしい其口説、止て下され聞耳が穢れまするゝと、出任せに恥しめて、つゝと其座を立上り、其儘家へ歸りましたが、扨は山三め、己が道ならぬ邪の戀慕の恥に恨を含み、御身樣に讐を成しましたか、女でこそあれ佐渡島お國と、京洛中に知られた此身、きっと此仕返しを仕て、御身樣の腹が愈る樣に致して見せませう、長うとは云はぬ、明日からして七日の中、それで仕返しが不足とならば、其時こそ止はせぬ、御切腹なさりませ、國も一ッ刃で

冥土の旅を、手を引合て致しませう程に、ならぬ堪忍少しの間、國が一生のお頼み、否でも聽て下さりませ』と思ひ入たる諫の詞、いふも涙の切なき心。了得に其と察しては男も否と言發て、遂に生害をば暫し思ひ止まつたり、是慶長八年彌生の末の八日、五條橋の南なる、出雲のお國が京の假寓にての事なりしとぞ。

第二　素性

此物語にて、兩人が身の上は概略知れてありぬべし。此お國と云へるは、原は出雲の大社に仕へ奉れる禰宜、佐渡島頼母が娘、幼少の時より、此國の國造杵築殿の奥に育はれて人と成りけるが、容貌の勝れて美しう窈窕なるのみかは、筆跡も麗はしう、歌よむ事も拙なからず、殊に絲竹の道に賢く、神樂の舞は分て堪能なりければ、十五と申しゝ年に、大社の巫になされて、御廣前に奉仕せしめられたり慶長元年の此にまた其頃杵築殿の許に、

都方より吟ひ來れる一個の浪人、不破伴次郎と云へるは、二十ばかんの男子、其兄弟が關白秀次公御不仕合の砌りに自滅なし、伴次郎も其連累どて北政所の御廣敷を退られ、武家奉公をさへ御構の身と成りてけるが、其母にてありける人は、杵築殿の大叔母に當りける由緣に就て出雲に下り、食客と成りてけるに、杵築殿も伴次郎を憐れみて我子のやうに思ひ、往々は太閤殿下へ、緣を求めて御詫をも申上げ、原の如く御旗本に歸參もさせんと思ひ居られたるに、殿下には御他界ありて世は何となう穩しからざりければ、其儘に過行たりけり。然るに何なる緣にてやありけん、左しも物堅き此伴次郎は、いつしかお國と契り初め、果は放れ難き戀中となりて、人の噂に立ちだれば、杵築殿聞かれて大に怒り、常の女ならば兎も角もあれ、出雲の大御神へ仕へ奉る巫女を汚したると、御神への恐れ、常事にあらず、明日は兩人のものを社司の聽に呼出し、吟味を遂げ、社法に任せて疾々誅すべしと下知を成しながら、其夜の中に密に兩人に旅費を與へ、忍びやか

に逐電せしめられたる情の程ぞありがたき。（これ慶長三年の冬の事にて、伴次郎廿二歳お國十七歳なりしとぞ）

さる程に伴次郎お國は、是といふ目的は無けれども京へ指して上りけるが、身に覺えたる營業とては無く、徒らに月日を送りける中に、貯の黃金は盡き果て、詮方さへも無かりけり。此に其頃京洛中にては、歌舞伎と云ふ俳優の藝、世に行はれけり、是は足利義輝公の御時より漸く世に起り、猿樂を和げ、囃子に琵琶琴なんと加へて唄ひ奏で舞ひ踊れる伎にて、慶長の初めに及びては、西國より流行出せる三味線と云へる樂器さへ、是に添へ加へて、益々世の喜べる所とは成たりけり。お國は素より絲竹の道に精しく、孫に神樂の舞は、山陰山陽の兩道に雙ひなき名人なり、伴次郎も亦猿樂は觀世が隨一の弟子なりければ、お國は伴次郎に謀りて、新たに舞の手を工夫なし、女歌舞伎佐渡島お國と名乘り、慶長四年の秋と申すに、洛東祇園の南林にて始めて興行したりけり。容顏美麗の佳人にて、舞は無雙の上手

なり、何かは仕損ずべき、唄ひつ舞ひつ、觀客の耳目を驚したりければ、お國歌舞伎と持囃されて、他の歌舞伎は皆これに敵しかね、遂に其下風に附て、舞臺に上り、爭ひてお國が脇を勤むる樣にぞ成にける。初の程は、伴次郎も、人の足らぬ折節には、舞臺にも出たりけるが、今は其人にも不足なければ、樂屋にて諸事の差引を成したりけるに、其後眼病に罹りて其も心に任せず、全くお國の働にて其日を送り暮はれしが、お國は業とそ浮たる歌舞伎なれ、貞女の操世に稀なる女にて、朝夕の介抱心を竭して至らぬ隈も無く、天ばれ優しき志、それにてぞ伴次郎は漸く平愈する迄には及びたるなり。

扨また名古屋山三郎と云へるは、原は東山建仁寺西來院の喝食、去る天正十七年、太閤小田原征伐として、御出陣の砌り、滯生氏鄕殿御先手を承はりて、深草にて勢揃ありければ、洛中の貴賤これを見物したり、其中に此喝食の顯紋紗の直衣着て勝れて見えて候ひけるを、氏鄕馬上より是を見て、

あな世にも稀なる美しき兒にてはあるそやと感歎して、遂に懸盃に及び、寵愛斜ならず、忽に出頭無雙の身となりて時めきたり、其後氏鄕卒去の時に、山三郎十九歲なりけるが、殉死は致さで、身の暇を乞ひ、剩へ氏鄕の遺言にて夥しき金銀財寶を賜はりてければ、富貴の浪人にて京に住居ひ、衣服大小馬鞍供廻りに至るまで、華美を盡して裝束たれば、洛中洛外の女これを見て心を惱すも多かりければ、道ならぬ戀に身を誤るも多く、果は淀殿松の丸殿に浮名を立られし事もありけり。されば山三郎はお國が美麗なるに心惑ひて、女歌舞伎の役者、われ言寄らんには、女は悅びて靡ふべしと思ひ侮り、思はざる不覺に唇を取りたりとは知られけり。

第三　耻辱男

彌生の春も花と倶に散り往きて、今日は卯月一日の日、衣更の節とは成にけり。四條河原なるお國歌舞伎にては、今日よりして狂言も更まりて、其

番組の中にて一際目立てる大文字にて書たるは、耻辱男と呼へる新曲、是ぞお國が一世一代の自作と、長銘打て札を立たりければ、物見高き京中の男女老若貴賤の分なく、我先にと爭ひ集ひて見物に及びたり。數番の後に愈々この新曲と云ふに至り、數千の人々堅唾を呑で見たりければ、先づ橋掛より出たるは、一個の武士に扮てる脇師、紫地の紗綾に鹿の花を大きらかに染出し、金銀十八の色糸もて縫箔を加へたる伊達小袖、淺黄糸の柄に蝋色金蒔繪箱の大小に、紅の下緒を長らかに垂したる美男、つれ衆の若侍に酒筒を持たせ、さも輕薄なる眼にて舞臺に來りて、是は先つ頃、陸奥より上りて都に返り住み、己が美男に己が惚て、女たらしを業といたす、屋敷知らずの浮れ男某にて候ふと、名乘出たれば、明らさまに其とは言はねども、衣服と云ひ大小と云ひ、容貌言語、正しく名古屋山三郎を其儘に寫し出したりければ、芝居の人々異口同音に名古屋よ山三郎よと呼び叫びてどよめきたり。此男はつれに對ひて、己れが年頃日頃許多の女に言寄られ、

日毎に屆く文の數々、古の光君も、昔男の業平も我には敢ふべうもあるべからずと誇り、今日しも衆て我に思ひを寄する一人の女が、あはれ御情には清水の下向の道にて待たせ玉へと頼みつれば、其心根の不便さに此處へは參て候ふと語り、小唄うたひて脇の座には直りたり。此にお國は、練絹に雲鶴縫たる舞衣を着て、金絲の腰簑を纏ひ、丈なる髮をふり亂して、黄金の天冠を戴き、鳥鐘の鐘を胸に掛け、先年越前の黄門より賜はつたる珊瑚の念珠を首にぞ纏たりける。つれには猿若が愚なる小者に扮ちたるを從へて、揚幕より出來りて、好める道とにあらぬども、身の生計に詮なくも、舞奏づるぞ憂てき、是は出雲の國より出たる佐渡島の國と申す女にて候ふ、我止がたき仔細ありて、契れる人と共々に、故里を立出て、都へは登りて候ふ、また身の生活の無まゝに女歌舞伎となり、今日もある客人の召により、祇園南林の長が許へ參らうずるにて候ふと、唄ひ出したりければ、芝居よりは皆お國どのよ〳〵と譽そやしたり。お國が來るを見て、浮れ男は、

我こそ君を招じたる客人なりと名乘りて、一曲を所望すれば、お國は彼の猿若を相手となして、天女の舞の秘曲を奏でたりければ、見人みな感に堪へたり、舞畢りて後に浮れ男は酒をお國に勸めて、仇し詞もて言寄たり。お國は初の程こそ風に柳と受流されし、浮れ男が戯もせで、頻に口説き、果はお國が手を引よせて、己が心に從がへんと仕たりければ。お國ははたと怒りて、其手を振拂ひ立上りて、浮れ男を睨まへて、和殿武士の身にて、おはしながら、去とは禮儀作法を知り玉はぬ事の笑止さよ、世の中の浮れ女はいざ知らず、此佐渡島國は眞の女で候ふぞや、殊には定まれる夫の候ふなり、假令夫の無き身たりとも、和殿ごとき浮れ男に、なびて靡き候ふべき、思ひ違へて遣ちし玉ふな、あら肝魂も無き御身の樣やと、散々に罵り散らし、暇申すと言捨て入にけり。浮れ男はお國が無禮なるを怒り、さあらんには彼女が歸路に待伏して、切て捨べきぞと、若侍に言合せ、笛の座に隱れて待たりけり。お國は後仕手には常の服に着替て、供をもつれず

唯一人、月を便に松原を我宿へとぞ歩み來ると、唄ひて出來る。是を見て浮れ男は、お國先刻の雜言忘れはせまじと、刀を拔て切て掛れば、お國は打笑ひて、和殿ごときあせ武士の鈍刀、この國が骨の切れべきやとあり合ふ竹をおう取て、男の刀を丁どうけ、右を切れば左に避け、裾を拂へば躍り越え、恰らかげろひの如くにて、浮れ男をよせ付けず。若侍は是を見て、主を捨てぞ逃たりける。浮れ男は不思議に呆れて茫然と、刀を提て佇む所を、お國すかさず飛入て打落し、竹の管を振上げ〳〵、滅さまに打たりければ。浮れ男は堪り得ず許させ玉へと、大地に伏して泣叫ぶ。お國は、おのれ卑法の待伏して、我を無ものにせんとは巧みつるよな、汝が如きあせものには、此國が今生の思ひ出に、詮術こそあれと云さまに、腰たる草履を手に持て、男の頬を一打二打五ばかりも打擲け、汝無念と思ふならば、此仕返しを致して見よ、女でこそあれ出雲のお國、逃も隱れも致しはせじ、宿所は五條の橋の南ぞやと、小袖の座を打拂ひ〳〵、眦をも見ずして靜靜

と、我家をさして歸りしは、勇ましかりける次第なりと、地唄につれて搖掛より揚幕に入たりければ、諸人の喝采、河原一面に響き渡つたり。

第四　仕返

お國歌舞伎の新曲、耻辱男こそ、今當世の色男、女たらしと呼ばれつる、名古屋山三郎が、お國に言寄て散々に耻かゝされ、其上に待伏して、お國に取て押へられ、草履打の耻辱を取たる狂言ぞやと、洛中洛外の大評判。かの山三郎に戀女を横取せられたる殿原は、當の女敵なれば、云ふ迄も無く、さして關係なき若殿若武士、または町人商人の若男までが、常々山三郎の美男を妬み、上臈女房あるは浮川竹の流の女どもが、雨夜の品定に、名古屋の噂の取々なりけるを、面白からず思ひ居たる事なれば、得たり賢しと此狂言の趣を言傳へ、此草履打は、眞の事ぞ、現在誰々も其場に居合せて見たりしなんどゝ言囃し、果はお國が夫の不破伴次郎の事までも傳へ聞きて、天ばれお國や、夫の爲に草履打の仕返しをたるは、男に勝れる氣性の勇婦、不破名古屋の草履打、との狂言を見物せでは、男の不覺生涯の殘念なるぞと、武士も町人も我先にと押寄て、芝居に詰掛け、是迄に例なき大入にて、京洛中の人々が寄も障るも此聞ばかりなり。名古屋山三郎は、ては安からぬ事かな、我武藝專修の者ならねど、假初にも滿生家の眞人、武士の數に入たる侍、然るに女歌舞伎お國ごときに、斯る耻辱を與へられ、道行く先にて、あれ見よ、お國に草履で打たれたる耻辱男の名古屋が通るぞと、世間の人に指さし袖ひき嘲り笑はるゝこそ遺恨の次第なれ、此條に打捨置かば、此山三郎、人中にて男は立つまじいぞ、此上は大人氣なきに似たれども、彼國めが歌舞伎の小屋に押掛て、散々に狼藉なし、國めを引立て連歸り、思ふさまさいなんで此腹いせを成すべしとて、宗徒の若黨小者六七人召具して、編笠に面を隠し四條河原なるお國歌舞伎に押寄たり。佐渡島お國に面會すべき用事あつて推參したり、出會ひ候へと、案内して、

木戸口に入たるに、芝居にありける人々は是を見て、誰そ何事ぞ、歌舞伎の見物妨ばし仕玉ふなと、聲々に罵つたり。其中に逸早も編笠の中を下より覗き込て、ヤア此武士こそ耻辱男の名古屋山三郎じやと云ふ間もあらせず、扨は名古屋が仕返しに來つたぞと、一同に騒き立ち、時ならぬ風波を起したりければ。名古屋山三郎、今は是迄なりとや思ひけん、舞臺に駈上りて、何にも我こそ名古屋山三郎なれ、お國めが此歌舞伎に扮ゝせたる浮れ男の衣服大小、我容貌を寫したるが奇怪至極、この見物の前に於て、不埒の詫言いたすとあらば、勘辨すべき法もあらんが、但し我に意恨あつての事か、仔細を聞ん其爲に自から推參したるぞと、聲音も震へなからに罵つたり。見物の中にて氣早の武士は、名古屋とやら、山三郎とやら、女のお國を相手取り、多人數つれて押寄たるは、武士に似合はぬ卑怯臆病、お國女郎の名代に、我等が相手に罷り成る、サア來い來れと、刀にそり打ち寄んとす。お國は化粧半にて鏡の間より走り出て、ヤレ待たまへ、鎮りたま

へ、佐渡島國は此に居ります、芝居の衆にはお構ない事、喧嘩の横買、國はお頼み申ませぬと、聲張上て制すれば、ヤアお國どの、心を据て其名古屋に聽對めされ、後詰は我等が此に控へて居ぞとどよめきたり。お國は名古屋に會釈して、何の御用か承はりませうと、色をも變へず尋ぬれば、名古屋は、ヤア云ふな國、汝が致す狂言の耻辱男、その裝束を殊更に、この山三郎に似たるは、汝が所存に出たるか、聞れ聞うと呼はつたり。サア其裝束こそ……と云はせも合へず、突然と芝居より舞臺に躍り上りて、お國を己が後に圍ひ、名古屋につゝと向ひたるは、四十餘の大の男、無反の大小十文字に指し、黒髭に面の半を覆はせたる武士、大の眼を見怒して、其裝束を貴殿に似せて興行せよと跳へたれば、余じやと高聲にぞ答へたる。ム、さう云ふ御邊は。貴殿どとき不覺人は、よも御存知はあるまいが、心掛ある武士は定めて噂に聞せつらん、大河内茂右衛門、今は伴大膳とは余が事でおじやる、余朝鮮より歸陣の後、この京地に淚人いたして暮在るが、

頃日噂の名古屋山三、歌舞伎ものゝ裝束して、女たらしが氣に入らぬじや、去に由てお國女郎に誂へて、此狂言をさせたるは、余が思ひ附、いま太平の世の中なれど、油斷ならざる世の狀勢、それに武道が貴殿の樣に廢頽しては、天下の憂と密に心を痛むる故、其戒にと茂右衞門が狂言綺語に假托て、斯は興行させておじやる、それで申分が御座るなら、茂右衞門が相手じや、打合なり切合なり、望み通りに致して進ぜう、但し此所では芝居の方々が見物の邪魔、河原でも往還でも、勝負の場所は、どこでも貴殿の都合次第、サア御座れ、一所に參らうと、片頬に笑を含ませて、事もなげに迎たりける。名古屋は氣て開たる大河内茂右衞門、鬼神も恐れぬ大豪傑の名乘を聽き、既に十二分の鬼腦を懷きたるに、其相手は我なりと云掛られ、大に恐れて後退なし、イヤ御邊が名高き大河内殿で御座るよな、あれなる國に申分もあるなれど、今日の所は御邊のお扱にお任せ申して引取るで御座らう。イヤ我等扱は致さぬ、我等が貴殿の相手でおじやり申す。

イヤ〳〵御邊は我等が相手では御座りませぬ、相手と申すは國めで御座る。ヱヽ、聞分の無い男じやの、我等が相手でおじやると申すに、サア相手に取るね。否か應か、返答の致されい、コレ名古屋殿、ナセ返答の仕召されぬ、返答ないは云分ないと云ふ事か、冒分なくば芝居の妨、イザお引取召されと、名古屋を木戸の外に追出して、呵々と打笑ひ、ヤレお國女節、待遠でおじやッたで御座らう、サア狂言にお掛り召され、我等もゆるりと見物の仕らうと、芝居に座を復したりければ、諸人みな大河内が武勇の勢に感じたりけり

(未完)

出雲阿國

櫻痴居士

第五　當番

「オヽ、何にも我等大河内茂右衞門でおじやる、佐渡島國が四條の歌舞伎、雖厚男の狂冒を舞はせたは、此茂右衞門じや。其趣意からは、昨日芝居の中にて、我等名古屋山三郎に言て聞せ、當人も申分おじやらぬと申して罷歸つた。若また其を無念に思ひ申分があるならば、山三郎自身我等方へ參つて宜からう、我等何時でも相手に成て得さするじや、然るを由緣も無い御邊たちを頼み、場所もあらうに、大勢で此お國が旅亭へ押掛られたは、何の爲でおじやる。幸ひに我等是に居たればこそ宜かつたれ、お國が身内の者等ばかりで御座つたら、御邊等は女童を相手にして、何と致さるゝ御所存で御座つたな。殊に承はれば御邊等は森右近大夫殿の御家來とな、森殿には、井戸理兵衞、國部四郎左衞門、

吉原庄兵衛なんど申す武功の武士、我等隨分面を存じて罷在る。此人々が參て の懸合とあらば、我等も亦心腹明て申談も致さうが、御邊等ごとき若武士を相手に致し、五十面の髯漢、大河内茂右衛門とも云はるゝ者が、論判するは長氣ないじや。まづ森殿屋敷へ引取て、我等が申條を若盟たちへ申入れ、次第に由ては右近大夫殿の耳にも入れ、其でも此茂右衛門相手に悪合て埒明いとの事ならば、ハテ其時は是非が無い、茂右衛門人に嗤はれても、不祥ながら論判の上で埒明やうが我等幼少の折から、三河の戰中で成長ち、年寄て猶更きつう氣短に成申したじや、御邊等も其覺悟でお來やらいでは、事の的が逆はうぞ』と剛氣の大河内茂右衛門、刀引寄せ大胡座かいて、破鐘の樣なる大聲して、返答には及びたり。押寄せ來れる五人の若武士は、よもやお國が旅亭には、斯る手剛の者は居るまじと、見越を附て來りけるに、思ひきや、朝鮮の蔚山にて、武名を天下に轟かせる豪傑が、お國が旅亭の大手を守り、大明勢を駈惱したる手並をば、再び此にて見せ樣とは。イヤ恐ろしや、物騒や、目に物見せられて堪るもの哉と、怖を成して、俄に慇懃ぶりに式臺して『何條僕等が、大河内殿へ極

意申述べ、楯突かうとて參り申さう、畢竟は名古屋山三郎、お國殿に故ない恥辱を受たと聞き、朋友の好み、一應その理承らうと存じて罷越たばかり、毛頭宿意あつての推參では御座り申さぬ、唯今の御口上承はれば、其にて滿足、いざ罷歸ると致すで御座らう。大河内殿、ゆるりと御座りませい。皆の衆、大きに無禮を仕つた、御免なれい』と踏臼の杵見る如く、一同が打揃つて、頭をば上ては下げ〳〵、旅亭の小厮にまで會釋して、逃る樣にぞ引取たる。

お國は伴次郎と俱に大河内が前に叩頭きて『重々の御芳情、御禮申述ぶる詞もあざりませぬ、併し昨日芝居の騒より引續き、大勢の御家來御呼寄に相成て、是に御渡御座あると、何とも以て恐縮なれば、御家來兩三人留め置かれ、殿には御歸館あらせられ度願ひ上まする』と演たりければ。大河内は首を横さまに打振つて『否々昨日の今日じや、名古屋山三が腰拔でも、鈍刀の手前、何とかせいでは居られまい、是で我等宅へ引取り、其後にて其方衆へ怪我させては、第一我等が顏を人中に出す事が成り申さぬ、唯打捨て我等心任せに致させ召されい。但し唯今參つた青武士共は、津山の森が家來と云ふたが、右近殿が何で山

三めの肩持たるゝか、其が不審じや。オ、其分別があり申す」と急ぎ奮狀を認め、若黨に渡し、斯々せよと命じたり。斯て其夜の二更に近きころ、馬蹄の響き人數の足音と共に、聞えたるが、お國の旅亭の門前にて一同俱に止まりて、門の戸をホト〳〵と打敲きて、案内を乞ふものあり、誰ぞと問へば「是は井戸理兵衞で御座る、大河内殿お渡りあらば、御面談願ひ申す」と答へたり「ナニ井戸理兵衞殿御入來か、いざお通り召され」と大河内は自から出迎へて、酒肴めさせて、手づから自から侑めつゝ、他事なく打語らひたり。理兵衞申しけるは「態々の御使恐う存じ申す、御奮狀拜見いたいて、打驚き、國部四郎左衞門、吉原庄兵衞とも談合に及び、主人右近大夫手前、内々尋ね合せたれば、全く主人内意とは驚き入たる仕合、面目も無い次第でおじやる、其仔細を申せば、彼山三郎妹こそ、主人の愛妾にて、當節頗る羽振よき女。山三郎昨夜伏見へ罷越し、右の妹に事の次第をある事無い事物語り、其妹めが國の中にて尾鰭を附て、巧く主人をたらし込だと相見え、今朝に至り、主人近習の若武士どもに内々申付け出京させたると、漸と相分り、其より致いて某等三人の者が、主人目逃り

へ罷出て、山三如き者の肩持て、歌舞伎のお國に意趣羅し致さんは、理否善惡は差置て、武門の耻辱と申すもの、此儀必定思召止らせ玉へと、詞を盡して一晌餘も意見仕つれど、性得一徹短慮の主人右近大夫、一旦申付たる事は、是が非でも通さうと云ふ氣質、それに妾の狐が魔術にて心をたぶらかしたる上なれば、意見を聞入ぬは扨置て、益々の立腹、可々汝等若輩等が、此儀に就て主命聞ぬと申さは其逆なり、此取扱ひ外の者へ申付ると、急立て誰來よ彼召せと、枯野に火を放ちたる樣の景色でおじやる、彼條では右近大夫手前の武士共今夜にも是なるお國旅亭は勿論、仕宜に由ては貴殿御邸へも推參するやも計り難い。左樣相成て騷動に及び、所司代お聞に達する時は、無惨主人森右近大夫一家の浮沈。この井戸理兵衞、年頃日頃人に頭下て物願む事が大嫌ひ、當年五十四歳に成るまで、主人の外に、平身低頭してお願申したは、殿下樣御父子御三方（秀吉、秀次、秀頼の三公）と大御所（家康公）ばかり。其理兵衞が此通り頭を下てお願み申すが。其昔は鍔を並べて塀裏を窺いだ好み、此旅亭の當番を某へお讓り下されい、是が一ツ。次には貴殿お邸の固は、國部、吉原が既に御留守へ罷出て

居りますれば、是へお任せ下されい、是が二ツ。次には貴殿の御往來にも、お國の出入にも我等三人附添ますれば、途中出先の猥藉、取押方、すべて仰付られ下されい、是が三ツ。此三のお願ひ、森家八萬石の興廢じや、武士の情じや、お聞入下されい』と涙を流して望みしは、贓實面に顯はれて、信に森家に變なき忠臣義士と知られたり、大河内は默然として聞たりけるが、皿の樣なる大の眼に涙を浮めて『ム、理兵衛殿天晴じや、宜う申された、聞入た、承知いたいた、茂右衛門直にお國の當番を、貴樣に引渡し申しておじやるぞ。お國上臈其方のお身は是にお座る井戸理兵衛殿が、身に替て慇懃固めさる程に安心じや。ハテ何の斟酌があらうぞ、理兵衛同勢は自分たちの爲じやもの、足揉ませうと、水汲ませうと、思ふさま用させたが宜しうおじやるハ……ハ』と嘲れ笑ひて、大手を振て立去つたり。

第六　所司代

染の如く、作州津山の城主、森右近大夫忠政は、當時在伏見にておはしけるが、愛妾の讒訴を容れて、緣由も無き名古屋山三郎が爲に、恥辱を雪き得させんとて、近習の若侍に内意を下して、お國が旅亭へ向はせたるに、端なくも大河内茂右衛門の武威に追返されて不覺を取られたりければ、老臣の諫を斥けて、自から郎中の若侍共そ駈催し、再たびお國が旅亭を襲はせたるに、何ぞ計らん老臣の一人、武勇の武士と知られたる井戸理兵衛が當番して睨み返ッて居たりければ、若侍共は打驚きて、亂入を躊躇たる所を、理兵衛すかさず道理を說て種々教訓に及びたりければ、若侍ども油汗を絞られて、すご〳〵と伏見に歸り、又大河内が邸へ向けられし者共も、國部吉原にまたいか叱り懲されて、遁々逃歸つたり。是に由てお國仕返の騷動は一先終りたる如くに見えけれども、森家の内訌は中々に終まらず。右近大夫忠政は、名古屋山三郎が愛妾の兄たるを以て、京都の森が邸へ住居はせて、助力なし、飽までもお國に恨を報はせ、其に連なれる大河内茂右衛門を取挫かずんば、鬼武威の武名を相續したる詮なく可からず、是に仔細を存ずる者共は、累代相傳の家人たりとも、武邊名譽の老兵たりとも、退身せよと、焦立て氣せき荒く怒り罵られたり。又老臣の井戸國

部吉原を始として、凡そ物の道理を辨へ耻を知つたる輩は、あな心得ぬ殿の仰かな、用も無き名古屋山三郎、歌舞伎ものゝ如き柔弱の小姓上りをかばひ立して、京洛中を騒がし、遂には一家の興廢にも係るべき大事を惹起し玉はん事とそ然るべからぬ、此上は疾々山三めを追出して、お邸へ出入を差止られ候べし、左なきに於ては我々共一同は、暇乞ひ奉りて退身仕り候はんと、意地立して、主命從ふべうもあらざりければ、京伏見以ての外に打騒き、唯今にも森家の騒動、事始まるべき歟と見えたりけり。

京都の所司代は、大御所家康公の御聖慮を以て置かれたる板倉伊賀守勝重ぬしなりけるが、是を聽て、こは安からぬ事なり、お國どときは兎も角もあれ、大河内茂右衛門は上(家康公)にも御存知の浪人、由緒も武邊も世に聞え、諸大名に縁故ある古兵、過あらせては勝重が瑕瑾なり、去とて森右近大夫身分に障る事の出來ては、由々しき大事にとそあれ、如何はせんと、思ひ惱み居られたる所に、此に大坂の淀殿は、疾てより彼山三郎をば最貧に思召ければ、此由を聽せ玉ひて、『此度山三郎が受たる耻辱の噂、その相手は越前の小姓(秀康卿)が、先つ年珠數與へしと聞えたる女歌舞伎のお國、その肩持てるは、關が原にて金吾(秀秋卿)が手に附て、味方に敵せし大河内茂右衛門、いづれも德川ゆかりの奴ども、右近(森)が山三の方人するとそ幸ひなれ、力を添へて目に物見せよ』と内々にて在京の大坂武士へ仰せ含められつるよし、臆氣に聽えたりければ、板倉殿いまは捨置べきにあらず、事起らざる前に取計ふべき旨ありとて、頃て公家衆振舞の爲に、歌舞伎一覽催さばやとて、お國を所司代の邸へ召されたり。

舞も奏で畢り、客人も退散ありて後に板倉殿はお國を一間なる所に呼び入れ、侍ふ輩を退け、膝通めて申されけるは『和御前が名古屋山三郎へ仕返に及びたる始末は、此伊賀委細詳う存じて居るが、和御前の理分尤じや、併し其事より思はざる大名衆武家方の喧嘩と相成ては、伊賀役目に於て成敗いたさいでは成らぬ、其上に大坂方にて與力する樣では、容易ならざる大事。畢竟その原を糺せば、和御前が事の起り、去とて理分の者を當地より追拂ふ事は、伊賀は得いたさぬ、所で當節第一繁昌の場所は、江戸で、即ち將軍家のお膝元、御家人、旗本、諸大名、甍を並べて門を列ね、日本國の諸商人、皆集て市を成し、京大

坂伏見堺を一ッに寄せた程の賑ひ。どうじやお國、和御前この六かしい京都を去て、江戸表へは參らぬか、江戸表にて歌舞伎の興行、伊賀がきつと肝煮しやうぞ。又道中の宿泊、小家掛の費用などは、万事不自由ない樣に、伊賀が都て調達して遣はさう程に、夫伴次郎とやらへも申聞せ、直に江戸へ下ると致せ。和御前の爲には必らず利運であらうぞや。左樣相成れば、和御前は名譽、當地は無難て事濟に成て、雙方の都合じや』と事を理ての勸の詞。お國は承はりて『御諚身に餘りて嬉しう存じまするが、夫へも申聞せ、又大河内茂右衞門殿へも談合いたし、其上にて改めてお答へ申上ませう、尤も茂右衞門殿さへ異存なくば、江戸下りは國が乘て望む所ゆゑ、都て御計に從ひませうが。但し唯今にては、茂右衞門殿へ難儀を殘し、我一人利運を取ると、此國は得いたしませぬ、此儀は前以て御斷り申上ますると、答へたりければ、伊賀守殿は『尤至極の申條、さすがは昔に聞えたる出雲のお國、神妙の心得方じや』と嘆賞に及ばれたりしとぞ。

第七　不承知

『イヽヤ大河内樣、この國は江戸へ下ると決心を致しました、其を成らぬ下るなと仰せられまするは、憚ながら貴君の御不道理かと存じます、先づ森家のお内訌いまにも騷の起らう景色、その本は此國が名古屋に仕返したが起り。又森殿が貴君をきつう恨んで御座るも、矢はり此國が事の起り。歷々の殿方の御身の上に過でもあつた其時には、此國は何と致しませうか。どの顏下て世の中に居られませうか。身を八ッ裂にしても取て返しは成ませぬぞへ。其上にお年寄られた板倉殿、よく〳〵功夫にお靈なされてか、敵ならぬ此國をお側に召して、云々の理じや、其方さへ京地に居らねば事は治まる、理分ある其方を追拂ひはせぬ、自分が計らふて江戸下りをさせる程に、そう致せいい懇のお談示。それを否と申しては、堅意地過て理に外れる。人の情をよう知つて、物の道理を辨へねば、女たりとも世の中には立てませぬ。國が決心との通り。大河内樣貴君もそれで御承知なされて下さりませ』と詞を盡して述へたれども、大河内茂右

衞門はいつかな聞入れず、大口明て啞々と打笑ひ『ハヽヽハ賢うても女じや、彼伊賀の古理に、すつかりと籠絡られて、お爲ごかしの江戸下り、語と云ふ氣に成られたな、尤も江戸下りは望む所、卿が無事で京地退散おしやるなら、茂右衞門も江戸下り勸むるが、今は勸めぬ、力づくでも急度止る、お國上臈、よう考てお見やれ、喧嘩の相手が山三の靑二才一人なら、闘諍て騒くは扨じや、ついと避して江戸へ上るが上の手であるが、今では歷輝とした大名の森右近大夫が相手ぢや、大坂の淀殿が相手の尻押じや、闘うても無い立派な相手、これを引受て喧嘩をすりや、勝た所で天下一の名譽、負た所が矢はり名譽、歌舞伎ばかりか氣性氣達、三國無雙の出雲のお國と、昔の巴靜を馬廻りする程の功名が、見す〳〵目前に、ぶら下つて居るのを、捨ると云ふは腑甲斐ない詮議。其上に卿いま江戸下りしては、出雲のお國は山三に怖れて逃出いたと、世間の噂もの笑ひ。其ばかりで無い此茂右衞門までが同じ臆病の仲間にされるが口惜い。何の伊賀が何と云はうと、醫酌する所は無い、此紛紜の埒が明たら、江戸へなと鎌倉へなと下りませうが、今は下ると成ませぬ、茂右衞門殿が不承知で御座

ると伊賀の禿頭に返答して、彼を惱りさせておやりやれ』と義俠の茂右衞門、膝を打てぞ勸めたる。

お國も劣らず、啞々と打笑ひて『喧嘩好の茂右衞門殿、その手に國は乘りませぬぞへ。一旦難儀を救ふて貰ふた御恩は、此で御禮申上まする。お禮が濟めば其後は、國が身躰は國のもの、江戸へ往かうと往まいと、國が自分の好勝手、貴所のお差圖は受ませぬ。殊更所司代の板倉樣、江戸下りするならば、道中の費用、江戸の奥行、皆引受て取賄はうと、願ふても無い好最負。その利益を打遣て、浪人衆の喧嘩の先棒、その舁夫に成る事は、きつう嫌ひでおざりまする。其で此身が京地を去らうと云ふに、そりや成らぬ、腕づくでも止るぞと、何たる理で仰しやりまする。噂に聞た朝鮮の女は知らぬが、此國は日本の女、茂右衞門殿、取違へては御不覺でおざりませう。オヽ笑止やのウ』と口に任せて罵りたりければ。大河内は、鼻蠕動して、鬚深き片類に笑を含ませて『これお國上臈、その手は喰はぬぞ、卿は心にも無い愛想づかしの科白を並べ、此茂右衞門に腹立せ、其を機に手を切つて、江戸へ下り、余に難儀させまいとの心中、

その狂言の奥は卿が眼中の涙で見え透てあるぞよ。併し卿が強て江戸へ下ると云ふなら、止も仕まい、卿が望に任せやうが、其後に成ても、此茂右衛門が往掛りの喧嘩、相手が好だけ止はせぬぞよ。佐渡島お國が居ても居いでも、耻辱男の狂言を興行させたは茂右衛門が注文じやと、一旦言ふた詞は反古にもせねば、變更も致さぬ。森右近でも、板倉伊賀でも、相手が殖れば龍に水、天正文祿の腕力を、若い奴等に見せて遣らうぞ。結句は卿が京に居ぬだけ此方の强味、卿は女性の事なれば、知らぬも道理、あの古狸の板倉が、お國さへ京に居らねば、茂右衛門は相手に挑まれても、手を叉で默止ものと見遣へたが氣の毒じや。伊賀に逢たら茂右衛門がひどう笑ふて居たと傳へてくれ。お國上臈用事は其遣であらう、日の暮ぬ中に早う戻つたが宜からうぞ、途中で山三や森の青侍に出會ふと恐しからうぞ』と嘲りて、應諾けしきはあらさりけり。

第八　十一樣

お國は、其頃陸奥より京上して、伏見の館におはしたりける伊達政宗卿のお前に平伏し、はら〳〵と涙を流して『平生御意掛させらるゝにあまへ、願ひ上げ奉るは別儀てもおざりませぬ、あはれ名ある武士一人を御救ひ下し給はりませ。此國が命は何に成りまするとも、更に厭ひは申しませぬ……』と思ひ入たる景色にて、事の仔細を述べ、政宗卿を頼み奉りたりければ。政宗卿は頻笑ませて『武士一人救へとの國が願み、汝が二世と契つたる色男の身の上かと思ひの外、大河内茂右衛門が義侠の往掛りか。さる噂をちらと聞たれど、左遷の事とは知らざつたが、汝その條では茂右衛門と通じて居るな、ハヽヽヽハ。茂右衛門と通する程ならば、此政宗にも靡くが宜からうぞ、呼こそ一ツなれ、男振に於ては、茂右衛門より遙に勝つた美男であらうがな、ハヽヽヽハ、……さう眞顏に成るなよ、戯じや。何も心を痛むるに及ばぬ、政宗計うて得させうが。併し茂右衛門が、其方に、今は江戸へ下るなと申したは尤じや。板倉伊賀守が操偶に成て、相手に後を見せるは、武士の耻、武士の耻なれは歌舞伎の耻、出雲のお國の耻に成るぞよ。其上に其方が京地を去たならば、茂右衛門益々力身立して、却て騒が大きく成るは知れてあるに、伊賀が左樣に思はぬとは、はて

扨彼も少々若者いたいたと見える。されば其方が京地を去らいでも無事に治まる功夫がある』と宣ひて、硯箱引寄せて、さら〳〵と一通の手紙を書せて、お國に賜ひ『この手紙を持て板倉が許へゆき、扨江戸下りと心を定め、伊達殿へ暇乞に參つれば、歸宅の後に伊達殿より此手紙が參りました、何か仕りませうか、實はお耻しながら、伊達殿とは内々懇意いたし、契を結んで居りまする と云ふて、此手紙を板倉に見せい、板倉も慈いて更に分別を附直して、事の治りを功夫するは必定じや、其手紙讀で見よ』と仰せらる。お國押戴いて拜見するに『そもじが京地を去ると、政宗伏見に罷在る間は、思ひ止まり候へ、政宗掌中の玉を失ふの思ひをなすべし、抑々誰がそもじをそゝのかして、江戸へ參れとは申し候ひうるぞ、强て下るとあらば、政宗同道いたすべし、そもじ一人下さんは心許なし、但し外に色男ありて、政宗嫌ふ爲とあらば、おのれ、丁見相成らぬぞ』と認められて、十一樣まゐる政宗と上書し玉へり。お國あまりの有がたさに、幾度と無く拜して『恐ながら十一樣と遊ばしましたは』と尋ね奉つれば『十一、十と一とは九二じや、其方が名よ』と宣ひたり。

斯て此手紙を板倉殿の内覽に入たりければ、板倉殿大に慈かれて『和御前、扨は伊達殿に思はれたるか、あな性惡のお國よな。伊達殿に靡く程ならば此伊賀も年こそ寄たれ、唯は置かぬぞ』と打擲れて、江戸下りの事は見合すべしと仰せられ、殿重に森家へ沙汰ありてければ、右近大夫殿は今は力及ばずして、名古屋山三郎を津山に下して、家來の列に加へられたり。

其後山三郎は山左衞門と改名して、右近大夫殿方にて出頭たりけるが、天守の普請に井戸理兵衞と爭論に及び、遂に横死したりけり。夫より程なく不破伴次郎も死亡しかば、お國は嘆に堪かれ、今は世にありても何かせん、誰が爲に歌舞伎すべきとて、門弟の某と云へる女に名を讓りて、二世の佐渡島お國と名乘らせ、其配偶の男には名古屋山左衞門と藝名を附させて、逆縁ながら追善の因となせしとぞ。

慶長十七年の頃、嵯峨の奥なる往生院の境内に草庵を結び、鐘うち鳴し殊勝に念佛修行せる一人の尼ありけり。古き人は、あの比丘尼こそ昔は出雲のお國と云へる名譽の女歌舞伎なれと、物知顔に語られしと傳へ承はれり。

出雲阿國 終

實價金拾五錢

明治三十年九月廿一日印刷
同　年九月廿六日發行

編輯兼發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田篤太郎
印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目廿三番地　佐久間衡治
發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂（本局電話五十一番）
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話本局十九番）

◎內に發行者◎
◎印刷者◎
◎登録商標◎
◎なくも無し◎

稟告

本書中ゐ丁附の相違せる所あるは少しく異樣の感あるべけれど开は本書調製上の都合よれるものなれば決して落丁ゐ非ず讀者諸君乞ふ諒し玉へ。

77
31

77
31

093710-000-6

77-31

五色筆

春陽堂

M30
DBQ-1127